大義覺迷訓

上中下
三冊

通13
1859

大雲堂

13 遠へ 1803

題花街始後

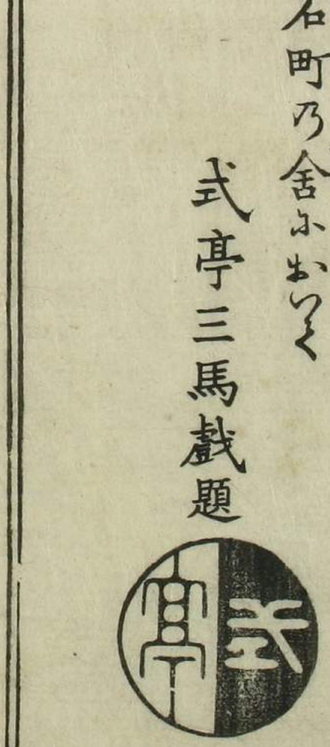
翡翠食ふ蟲も己が好ぐゝに空なる孔八種餝飼五葉水織の上菓子を嫌ゝ一山四文の琉球芋や陰瓜をさのむあらさを稗史に譬バ讀本ハ上菓子ゆゑ草雙紙ハ駄菓子ゝ。さしど這草紙も。あまる大俗ぢゃと命らるゝ看官もあんべゑと。作者の腹が黒砂糖なるべ。太白ね製法とゝもぞ。てゝゝゝ。爲哉乎也が半熟ぐ。侍客が腮へ私の法らゝぶ口へたまゝゝ。差店さ馬太菓子乃株ゝ。愛敬紙失禮ゝ。這般仕入方を吟味仕ゑ。麺向ハ和みゝゝ歯れはゝゝぞ。う侍ゝゝなゝ和ゝ俗文章れ。繪虚言ね衣をゝゝけゝぞ。上菓子屋と駄菓子屋と讀本と草

雙紙乃其樋聞れ國字小說彼琉球芋や陰瓜と御好物の女中方。子供衆ゟを讀易く。味安き一家れ風味ハ。上菓子屋お朝を顧ざれ。あゝほゝき戯作者心。チトあまくちな製法ゟまで。新製とおぼしめされく。評判ぐお需なさん。

御年賜ゟを持能のとちのつふ。

石町乃舍ふおく

式亭三馬戯題



大盡舞作者二朱判吉兵衛傳



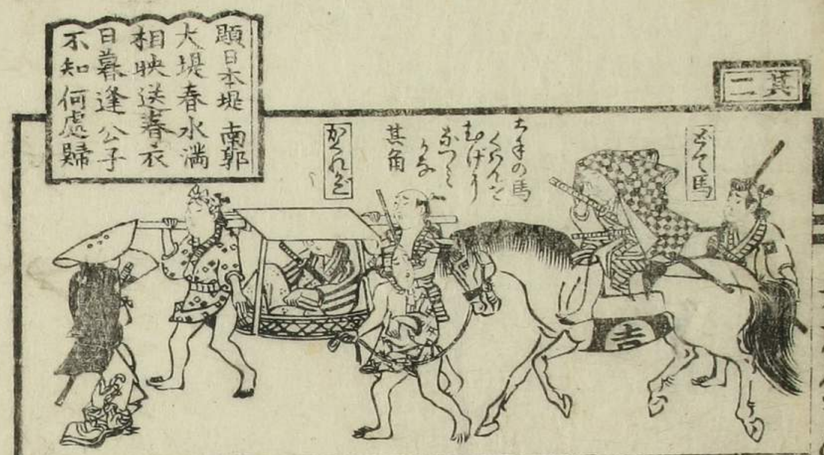

元と純子
三本
紅絹
五疋
金山
全盛遊


大盡舞
之鼻祖
三徳乃
生れ替り
深雪太夫
裏村菊
千山
表徳と千山と
称せど生質活達ふうく
仕使と雖ども千金花
なげうちて快ふうす
其粋雅剛にもんで嬢名
一時に高く津波大尽と呼ぶ



○大盡舞唱歌



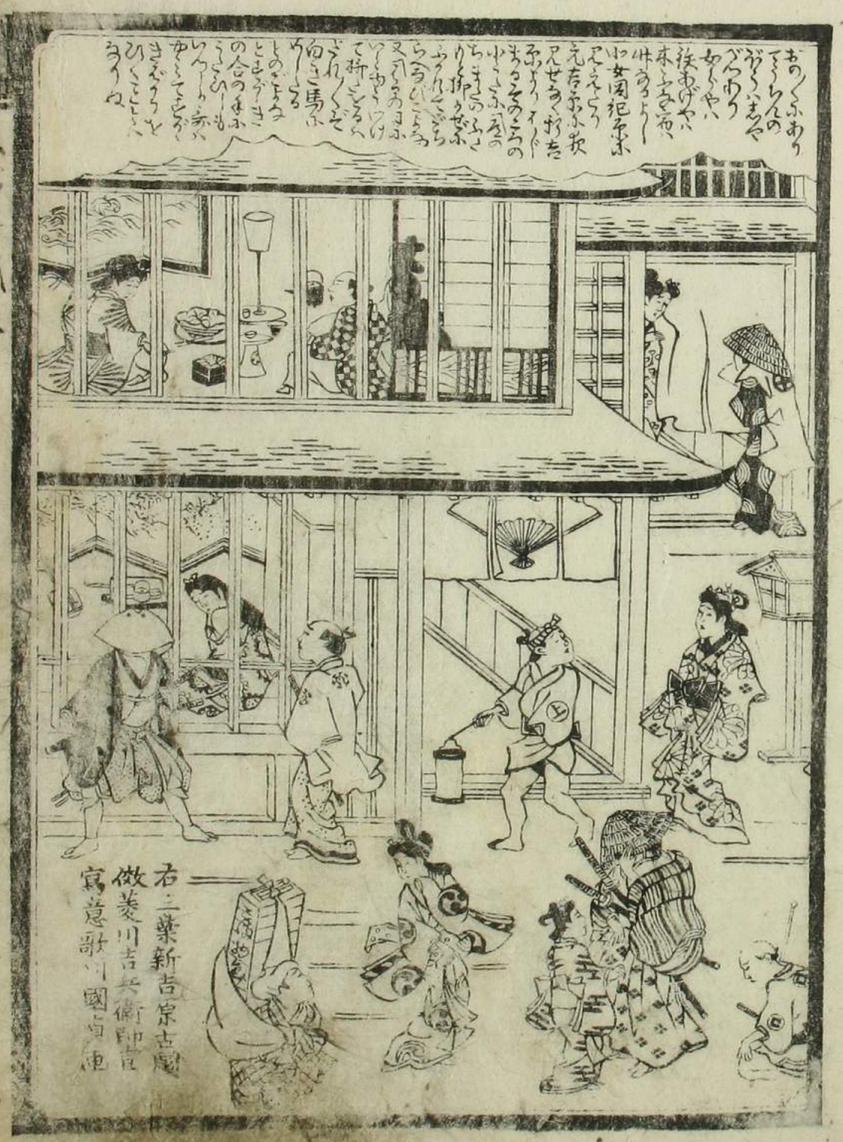


其ノ用ヲ匂ふ
場末ふぜい小ぢまな妓
[illegible]
あげや半四 あげや町のげいしや
[illegible]
三枚五文の小ひきこみ
すゐ神雑談ふ屋あり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

其三



右三葉新吉原古風
倣菱川吉兵衛師匠
寫意歌川國芳画




大松屋の遊君
やまと勝山
逢坂
古人大谷十町拍仕使圖
横地朗斤春章畫一枚繪
こんなものその本文ハ江戸戯作者二馬編
仕使土手節重兵衛
実名以瀬重兵衛光氏


名屋古花袋
居續の夜着
あそこで坐て
さてさて扨
◦純子大蓋 実名
牛窪藏左衛門武定
右圖
古人勝川春章畫中村大秀鶴似真繪













○著述醜行のよう幼稚なり　本当に八ツあ退

流転（るてん）　三馬作

敷回（しきかい）　阿古義物語六冊豊國画

一名 大磯十人きり

ほうや金助板








奉納
大願成
雙雀堂
草木國土悉皆成佛
經曰



姿容秀麗
性格風流



妹背山
女庭訓
吉野川
女用訓蒙圖彙
貞享
式亭珍蔵

編二





大國屋書籍

ごろかとおどてふし十七文うてうくのそ
男たてとるりね山の川大八洲こふあ
ひやうとるりてうひふちふうう
まち天のむくひきくるおそるべしくく

○これより伽の津をよむこと卒章をよむ

○さんざこふあさ尾津波と名ふさうれのうぐひの大どんあり秋と
日ごろ大のそんかうひらる日の金盃あそび、八とうてうれもさむ
行の秋のろものろふく、さんえおろもそる世ふもどごうそで
るやろじがさ、あめひ向みくこれもみおる〳〵秋のろのたて男
あ〳〵ふか人行さげおくろ、さぐひみめあひとれちぐひてんがあげ
てえのへもう糸「ヨく津波まろてかうの「そさうのふへあさ
尾よびうけさへるんぞ「ねろあもちろとあひ、そこそこて
るくろ「そこそう「ヲそのうみもとてんごのねだをそてあるこる今所
さうりのたてうくびひなあへまれる男るり「サトあさ尾よびうけ
さへ伽の用どや「イヤ外の用でもないがりくひさのあがある「そうさへ

大國屋書籍

伽を「ハテりがさごふくるんである三浦のりうがりいうの「そ
かうろりのをあーがるの、あるふよろてあるまりのでもるそのそ
りけさろう「そんるろういうろ是までよびくけ、あさ尾ごよびふ
やんどもあれねとのふるぜふとあーうやは没とりけあること紙ろ
ひ〳〵へてのくんじ、へのりろとさのさるくべそんるりあもるせど、俳
波ごかせふるろてあさ尾ごさこれることのられてよびなの
鄭へさてあさ濱会中くう糸ごかたくぬ、ぢやふよそりふのどやもろそ
うえや「のやじく「りらふさぞ「るくぬろの「ごろほろこんでのうふい
のやじやろへはの画波ごがあさ尾ごとさふやるることのられてうろ
ろくねほろこんでごろとるくねなどふあさ尾ごさうそふてのくう
への「ハテさろごろとくさせろふそへ「そうや
ごうるりと「そんるろとで「ごうるりと「サア「サア「さあと多ぐく
ろひたごのふけさをねぎとてくく凡七とふさとごの二人ろり

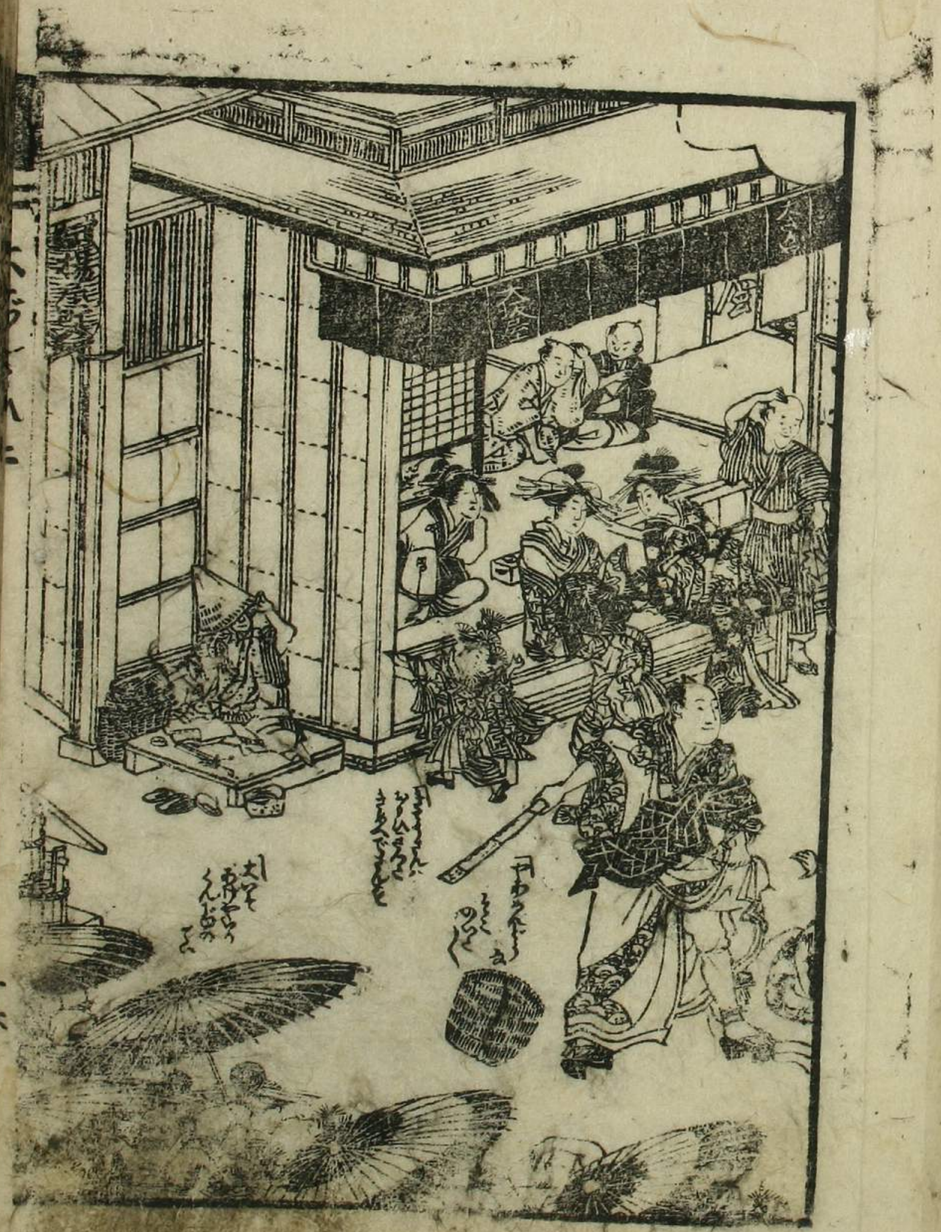




大磯の

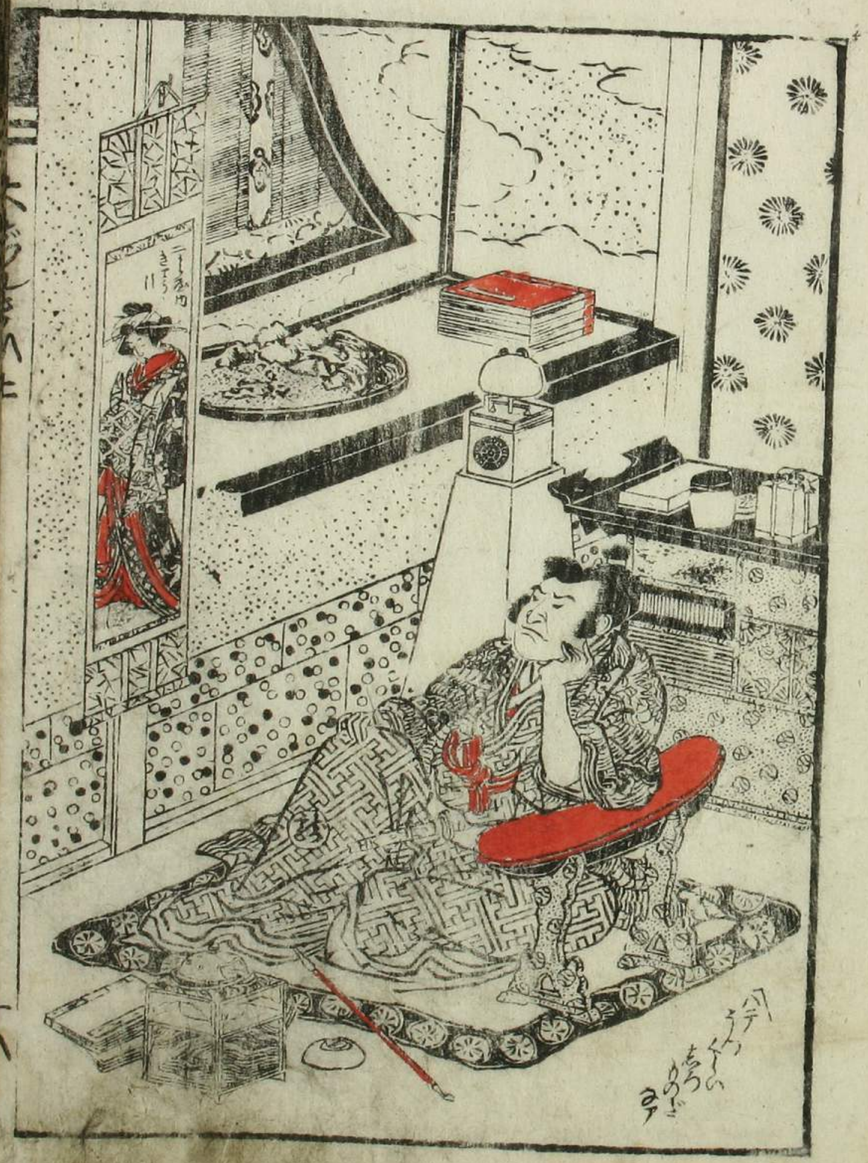


三立目



ひつかゝげてたちむかひ「ヲヤあさ尾どうぞ〳〵とゞめてくだされ」
うろ〳〵てとひふぼけかゝり「ヲヽうれしやとゞめてくだされ」
とゐてゐる〳〵くせにどこのとゞめるをさそく（双方こうく）のそゝ
うざるおさり。又八とゐてうけつ（ぢ）いもるれんのおりさる。ふう孫と
孫をくゐざをらん。なあひがらふ三浦のきてう。それとこゝろえるよりそ
ゐて「まあくまことゐんせおふさうこんどちう
もたがひふかとくねせうふ（どう）ふろ〳〵のてゐるかいな」ヲヽおり
ろの「ヲヽそのふりふくのたてひきつとりあふきてうろ二人ゞ神ふあ〳〵
なおり「サアおさ〳〵ゐんせくハヽヽうをこゐんせうやうさ
分う〳〵このふりふく仰（おう）とむうでんござんとまのがるとこふ余波（よそ）
とそてふみなをざ（ふみなをざ）れの分あへけるげるる「そおり〳〵ろの波（なみ）波サアさん
とのくど波（なみ）ゐをとるねさ仰（おう）ろひのひとゐあん「あさ尾ひと〳〵
のかく行ふとこのころにざいねさえ波（なみ）ようあげてこくと眺（ながめ）





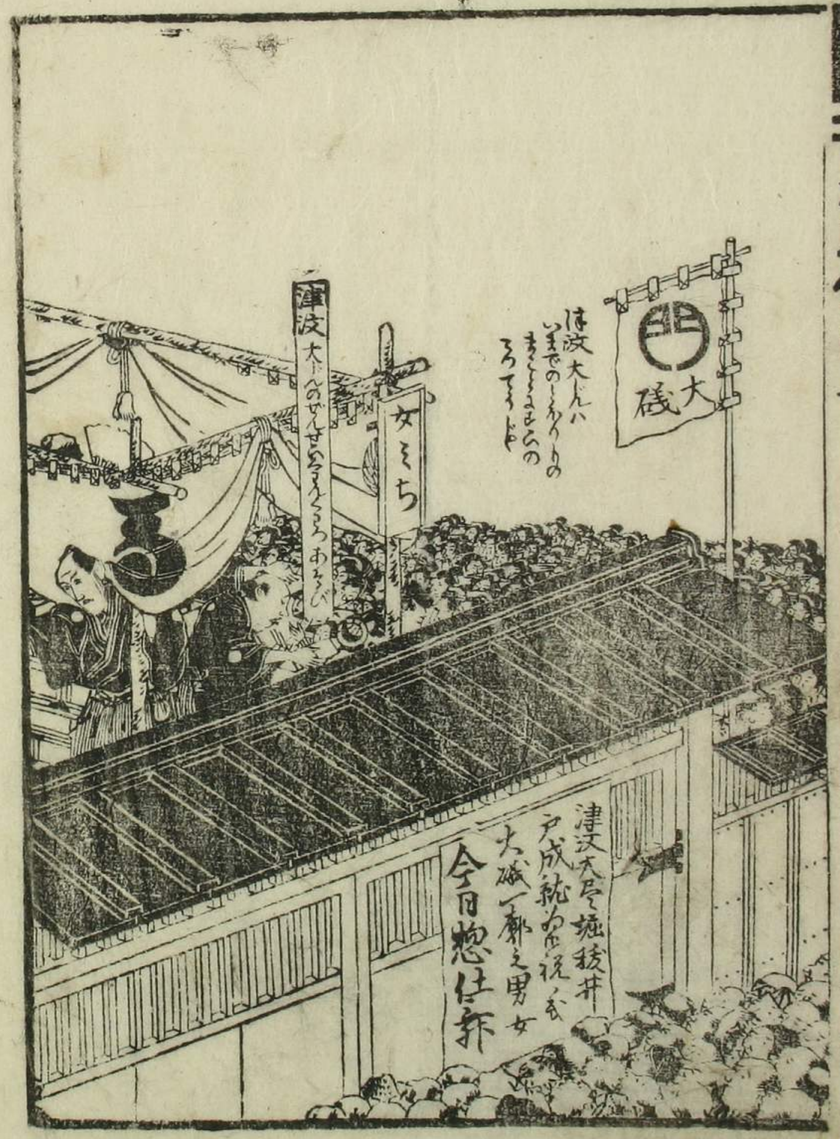
○ちかふ下派の画の一派を伝ふる佐久の十郎ざえ久のちかふ牛窪(うしくぼ)住(すみ)武定(たけさだ)
とのよりのあつぱちかふ紙ろとろ(ろ)り紙ろ人くらげ
ひどうりよえうりろ(ろ)さんれども佐久のの人おてんぜん祖(そ)より武功(ぶこう)ある
りのるんべけんねにふくちあちこう守一の長男(ちやうなん)ゆゑんなれありて
ゆべさをりのもみろりろりあるこれかるろこよりのこみげろり
とてあるこのにく紀綱(きこう)をりくひろるがその中ふもんくらげく
のかけりのふけのせへのろ名(な)をござありこれかそのころ名ふたろき
ろふ紀のふでにてこうくくのゆうんきてうとりふものれ名(な)をござ
ちろも生(せい)うろくうるよ(よ)をまろ(ろ)なれべ紙(かみ)をろつくくこれをそるふ
こんぬのふくへのふまちそとありかのござろくござ世ふかうるびどんも
あるものうるをり紙えてひろのせへをよびむろ人一生のありひ学ふ
せんとまんがのろひふちろぐくふづりの多のよろれべるろくく
ゆくるうるかぞとれをまちてむるくく月日をとごくぬ

○さても津波大じんのさてうをあげづめの大あそび此あげや半ば過る十ばん
津波ど今宵のみせいおそてあるんるくあり井戸ぜうど迄これだその様
とてあげやの二かいふ大ぜいをよびあつめ大ふくろをそりよ
まづ一ぢんふあくりしたきの字のや花ゆをうざ紀某又百俵かごぢ
せ国と注こうをねこ三ぢんふとえふろ揃これふあくまもる三ぢんふとえふろ揃これふあくま
二かいだうをのめくまもる三ぢんふとえふろ揃これふあくま
の遊徒ふくふとりろ湯のありひつ紀江ぢんふ大空三百俵ごへ
うざのあげやのてい江の字ふをうくまふかけーグ三百俵の
まめふあうり鬼ふ外をとお客ふ内へのまめあれるひまめでたへこの
招ちあそびとうちあひのなへこのちの二朱判きちくぶ十ぢづきんかちんざうれの井とりくへ
てとるりふもありあるひふるねぐひをとさぢふ

びんがうぐくとふあくるもありげふぜんせのうとくうろ大ぐん
どうとゆてぞやめふあくるさてそのあくる日とるれば大ぐん
あくんうだり廓の男女熱仕舞とて大門ふろんねだりて熱
おまひのふざをたりあげや町の中の町ふふあ名をはくかさふ
津波ど宵彼のまくうちまへーけところあて熱だるのう称とさ
さんとてう称むこのふさあーあけてあるひ八百あ二百あ年あるひ
ふ中まふたのそふふさちくもちまざるも百あはくく紙はくあ
げてやのくふ二つ三つそでやたりとふあーいくへけちでばくり
市うやげうんざのふぜんのざくあり

○あざるりのをさーくうざとりふてたのせろの金紙を湯あの
ざくつの年とのの上のろ天のをちをうろぶーざくんやくぐ
ばしうくく金紙をそまろふろまふるるれかそるべしく

大磯
大磯
大磯

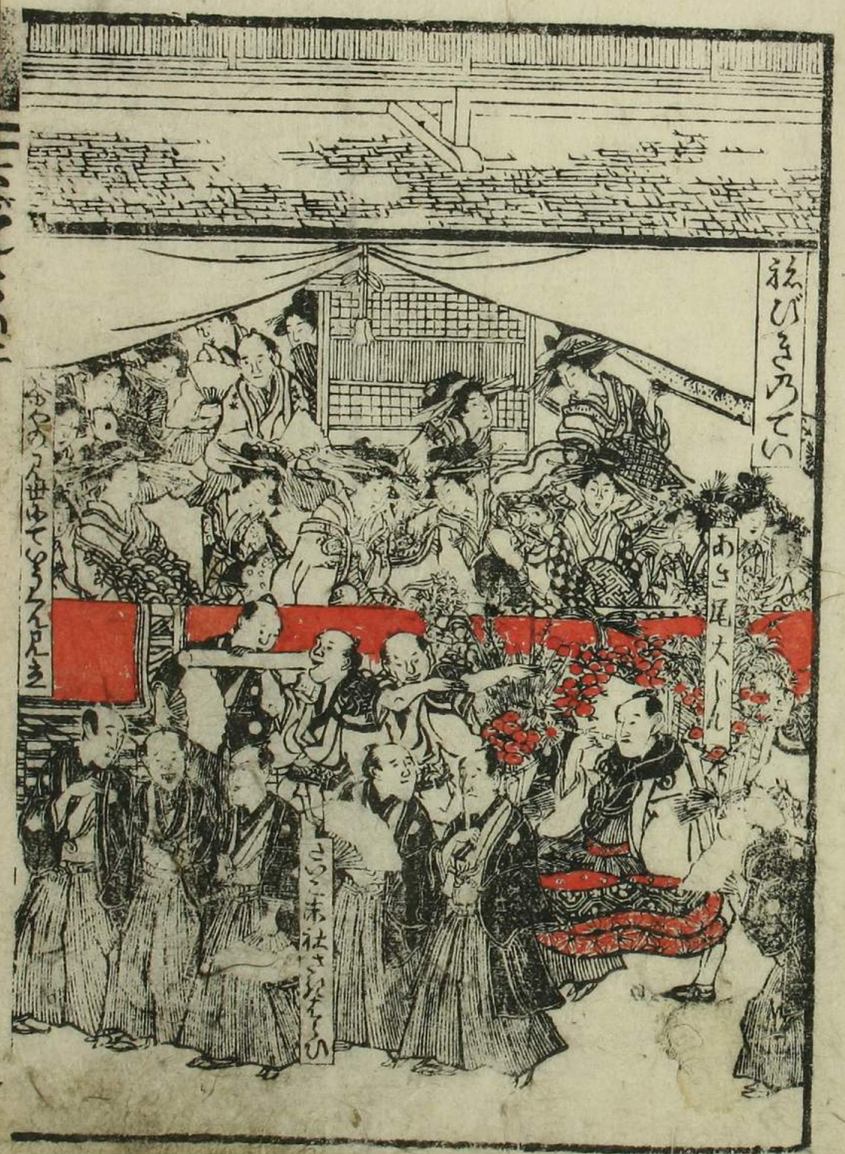

大磯
津波大ぢんのぜんせんそうくらう
女ども
津波大ぢんハいまでのこうりのまことにおそろしきことのよし
津波大ぢんにて堀抜井戸成就お百祝ふ大磯一郭之男女
今日惣仕舞


惣仕舞渡し
男ども

○とふみおさ尾大どんかきてうをありひきうりてのち大根新町
ふくま浦星とのふ柱君をあげつゝあぼ
あそびくるがけいせの裳のてんよふのぎりつゝそゝ家中きぬ紙絵人
のまふけたちまちもんしゃうくぐりさゝとるるゝひるり
叶とねそひきゝざれべのちゝあともひるゝさゝべかふるひ
る浦里をうけてふきゝべくふくへらゞとちうひて大のその
くるとふあるねこあげるりの人ぐくおをんせまのげをおりてこれハ浦
里がおねこあげるりとてむろしくれべくるるの男女よろろぶ
るかぎりおくゆふあんもりてるんぎとるりのもおか
うしふおさ尾がなさけふてふゝべうしおりひをは
まとふまとのゝるうゝぞとうんぜねりのこそなうりけき
さるおどふ大じんまひのりんくふさてその仕ぎの大じん
ハおさ尾のきゝふとぐめうり新町ふくれるねぐやの

ねとりふるうゝさとのきゝさるめをそゝあてこれ紙おうけ
まるかまゝそゝふうくまあねねおそてくたくさん
ひれてんとなぞゝふくて仕ねそふなのこれうれくこてうえんぶ
ふかくてうやさて仕ねぐの婦人ふおるうんふ
おゝうるり小尻名名六法ふくぐさうきの法あるる
新る月のとうれおやまひさゝ紙あうけまゝとう
ゝふ仕るゝんろ


かや師里


おやつ入世ゆでやうろんどん走
あさ尾大しゝ
さつこ末社さんだいい

○こゝろ下絵の図繪ニ書あり浦ニ猟師おひたとりのあり
さのころむもろの佐ゝ紙えてさどがもゐへなゞされゝばあと
みのころ妻をのちのとゐのおたゝをちゝゝふゐる猟師の
ひさをいとゝゝあゝ紙うちはうをゝれあさ々のゝうかを
うふたてるゞゝ何ゝそ〳〵てをゝとおひたゞもやゝれありてさ
とゞまようたちゝうあゝとゐ図のごくてゝゐの浦よゝおをいゞ〳〵あゝ
ゝゝゝうあゝとゐ図ふ大ゐるゝち木の二尺ゐうあるゞあゝゐ
うちてあゝゝふ大ゐるゝち木をとりて
おゝりてゐひの和あゝゐ紙中ゞりゝれゞうのゝちゝる木をとりて
うゝの中〳〵ゐゞげこひゝもゝろゐゝおゝとゝびちりふ
とゝうの ゐるゝ侍がゐうちふひゝもゝろゐかゝうゝれゞうの
侍大きふいうてゝゝゝゝとゝよてきつをまへちゞ
ゐのちゐやまへきゐゝうてん〳〵ゐつねゝそゝゐゆゝし

下さゝれよとさゐぐふゐる紀ゐぶれど侍さゝふきゝのれゞお市
け武士のゝ木をゝるふ牛窪就をゐありゝれゞ女かのたまうゐ
ふなゞさふのゞおゞりてのゝふ就をゐゝゝれゞ女かのたまうゐ
松屋长兵衛ゐ方ゝ八侍ゐ家のゝらのゐゐゝれゝのざんぶて
らゝけん今け武士のゝ木をゝるふ牛窪就をゐありゝれゞ女かのたまうゐ
ざあれたゝでや後のけ猟師おひたとさゐをゝへゐゝるをま
さのゝころ侍後の図へゐゞゝゐゝそのうゝゝそあゝんゝゝへ
いおひたゐ松屋长兵衛が妻おいちゐりとゝゝゝのまゝゐ
ちをそゝれてあくゝゐゝれゞ娘おさゝへさゝゝるくゝさゐ
のひまゞゐさまふなと油をひくゝてゐ紀ゐぶるゞうあくの就
たゝこれをきゝてのよくのゝさゝゝゐんげゝゝねけぶゝの
松屋が妻ゝよゐゐゝゝゐゝゝまゐゝてゝくゝてざん
ゞんなゞくあくゝうざんゝまゞゝのゝゝゝゆゝさんゞゝと力紙





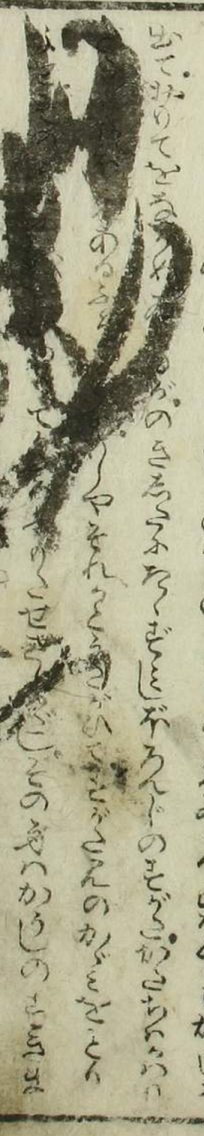
ねくよとこそそゝろがるのちうかさねをきたるおとこ
あらとたゝふる〳〵そのところく猟師あるこゝにきたよせて猟師ども中
をつゞてさるくとつびくれへ綸をろうきさのつひぞとあをそる
めてこゝにゆきぬ猟師のうちおう市ありやみがかりてそのひう
のしるりのあり〳〵どもをもとう対一の綸をろうなれば のちの
ワざろひをおそれてむさんなろうくをつゞみさうむざんなろうな
おもふ綸をろがためふあるくをもちえんぐ
るろふくろ〳〵死の死をおろうとうさおろうをまろふりよせてこれ
おこうよくさけよおんとのとくさるぎひたどのへりと佐原家のいろう
あくさのぜんの武士綸をろがざんおて鬼をむさろふるぎれのよ
「あのと云ことて沙汰へさどんに十九ことるまのとうことこと
おさくろうよりのをまそ仕事十紙よりのうくふべごてしおろざの続
時風のたよりもおとろまるおてろ〳〵せ〳〵ひて月末おろの

おうううまてふろうびおうおをろうまのやとたのしろひもなさけ
ろのやおろ〳〵おこるる綸をろがあのをおて大死とる物ごろひこふしごろ
をさこるく〳〵おもとの〳〵毎してどうぞかろをうろてこるふ今をへ
おくせ〳〵ごそるごあ孫のお吉とのへかるろ〳〵のの中死ふれおうとう
こえいろうそるこうをこう〳〵とろるおうらうくのひろふ
せるく〳〵せへるろ〳〵まろごめこるるこうをおて名の
たろへよの女うりかるるこうとうみどたろ〳〵ふとれともさごろるろこと
多つまで近ものおとろぶまるくあんでてむうろ〳〵せ〳〵ぞや物が死
ごそのあとでへ大のそくろごろゆきあのおふわうあひなう
ごのそろよてちんりろ〳〵ふさろのうろ〳〵紙をほしてとれう
かー〳〵のまへのうえのたのこそこまるのへろ〳〵きだんまつるおうさう
うろ〳〵さうちおー〳〵さんなるよりとまてせろうよせのもいれねるい
ぞやろ〳〵こくかいろるそのやまろうろ〳〵るのふひまおとてろ紙



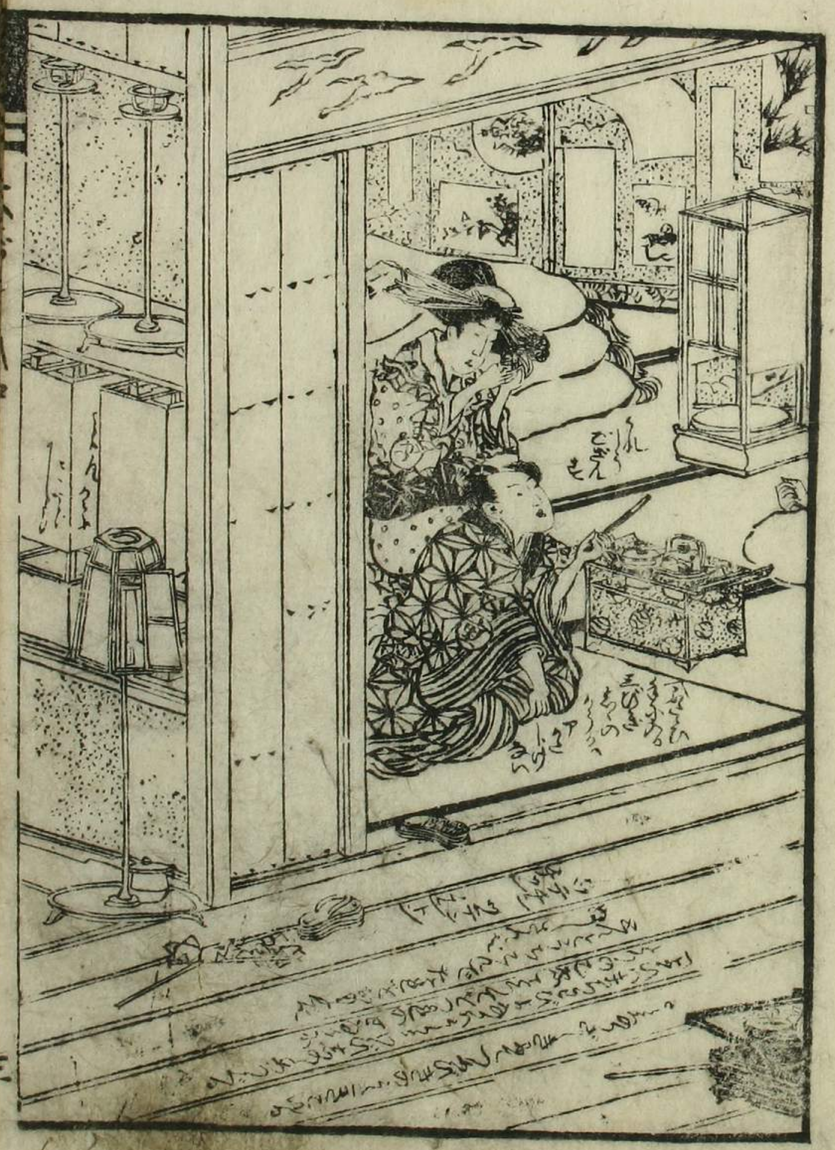
昔唄花街始　巻之中

江戸　式亭三馬　編



さてもの七十兵衛どもそぶとあざ名して男ぶりとうりなりしもぎうある京
くおうふめぐうおうんとのてぶてごてろうさんどもいまぐあうろうれざれば、こむ
そうとうりてみくのろざと紙ろのろうろうろ山へある日からみ
出でみりてとるろうのさろうふてごとがろんどのそぐろかさちろへ
ろうやそれうとうぐひでとぐさんのかぐをとの
ろうかぐふろうりこせうぐごとの名へかうしのとろは
ろうひのさとるもぐどろそろ兵へろれがぶうぐごろと
えふーのされてのら。ふうびあうのげ。ん今とうかさぐひふ兵へうねぬ
うて二そのふあぐう。たぐひふつさぬのそうのうらで山川大八があろんみて







おとりてそろそろおくりかうべ
ちこそんとまでもいきそのなさけふかろをひそふ
にうしとうおるお大八ふたりくらいばるとくらいかしとのる。ぬかと
大八ぐあいじろくんのよのちくまくじゃうふようってこれをもろ。ふのん
のるとろひしやをろれひそうくぬ家くさそうがくおおお大八ぐ河ふ
たぐんどやっこかうふとろをおねふおぶいこしとあろふさろねるきゃる
こよひおやくるをまねきてよろんがもまろをりのぐろ。それじぐ友人
のとのごくとりのどとそべきちのそろろれべりしいくといぐ。きろとお
ぎるるくかくしみやくるのとるくせうのんしてそんじろ人ぐどとそぐふ
くるもあるべくんど。ニごんとるくせうのんしてそんじろ人ぐどとそぐふ
きんわろう。とおひまぐふくんむをつれくれべかとのどくこしとる
れべ。ぬよそれじぐ。あくろあそるぐちし。そこのとのつまおろり
まうをべしとびきちくのかうぐのんちこれをとりいぐし

十をくふいうしくれべあくのうできるふろうぐくろ。あうぐるぶとうう
わしいとも。今とづくおしてニ百ぬ。ひらふこせうるむりち。ゆふゆゆえ
てきろやろうねろ。嬢うニ荘みろそ思ぐてふろきろ抓うこねきう兵もく
うとまおぬげをゆくさねだろうおて。よろとびおふぞどうおるる

○さてもそのち十そくかろ山のあくんハ十ほよそべるさけおてあひ
もうろぐとうふとるし。ぶまとふふしぐ。そとぶろくと
神ホとのようくふうやまひろ。すほみそくんやでくこれいうこん
てのものふ。ぬよそんあくさめぐ。ずちくどのふたのそうたふさのう。
それじ。為時ちぶどのくそうちふあのそ。そこじらの親をつとる。その
まつしんのそぐめとのふ依ろ家の長屋牛窪能左ろとのふ人のな
さみおて。それじらうくのの。ぬ。ろれべつぐろめふか大もんある人るれべかねてありろそろう
と。ふろるふけやど結左ろつかるらくさのぞんのつれぐ。ぬ大をこ浦め


火乃用心


御打合せ

○こうふまちさは波大ごんの其のひこそたいうち
とのふうぶんたよく。ぜうんのきこえ。うちとのるまくまく
出へやたのふまもびとうんのうくばはをかんどうほそれへ
あるさふいうり。ろんるのさうざうのふかこひとくのうとそれ
つのあいあこざさりろうのふかこひとくのうとそれ
そことよかしことそのびあるふれるをうねてこのりかんをうけ
中村吉三とりみどうけるさのゆくしやつねぐは波ぐそざさう
ざのたのこのちるりしうべけてこれをえてきりをけてこれをく
は波大ごんさま。どうしさ茶をんのごもをもろうかくくら
ようとびろうて。かことのそでをうとむれべ波也。とこくも
さことごど。むうしく大坂の旅侍でふるれどコレ二朱をんさう
ととそ紙みざりがあらいくく谷とうふちもろうのねくけへ
やいうひのだちがあるうて。ふあいのかやぐちぶかんどうへく

きこころをむろんとそ。とこころひしかれをまねけど。きそう
をべは波とのみりのあげづ図て一夜もかうの客をむうど。結
たろまもとくれんがのかりひまさうに右どへうくとうとう
みるているれべ。それじろるふたのびど。さいうひそこうとへ名
ふふまて男ぐそのるるれべ。結をうがこうことるり。きそうを
ちもびしてのかくべ。るふとうとれふちろん。世のかふ名わど加
るりのいるて。それじが今のつまも。むじもろべはさうやの茶代
とて。ゆびまでさり甲るれべ。ひが身かつれていとれしくかりへ
るくろうと。かりひへてさのこくれべ。十ろへ大かんあるよろへが
とそぶこごんとるくうけひさうり。さそゆびさうりのそどまろう
へ。角町かくをるれ。つるやの名とりふ茶代の君さるが。十は
のみろへふさうそひるとたごんまものふろうろるれば。よろへが
るすろうき

ぶんのいきおひもびんなうごきのまちぶかきこゝがやうなかうさうごとおりそれが右ちくへるさうごふくるとさてもくるさけるき井とぞ紙きくのうち。たゝひれかんどうとあるとてもてつきりとれんくらしやのれんべう。るゝあんとものれんくらしやのれんべう。るゝあんとものれんくらしやのれんべう。るゝあんともの



「三朱をん　おもとへ
「とりの　ぜんなる　たうとうとうとどうえんと

「あげや半四ろさんろう
「はばうるどうえん



「きのふまでくらぶ
はばかりみの
ござゐをこえれ
ぞういとえそさ
とんかぜあがやーらい
たゞさでであ
うらやアぐれて
ゆふりの　あのかぎの
ゑみひげがり
がこをあそくろ
ゑやかりごーて
ろまやれさ

「どこぞーど
どぬらとへ
さろくのので
わらう
ろんとこもが
ふれろろ



九帳ゞ程の猫
ろうそくをとろて
玉をとろ

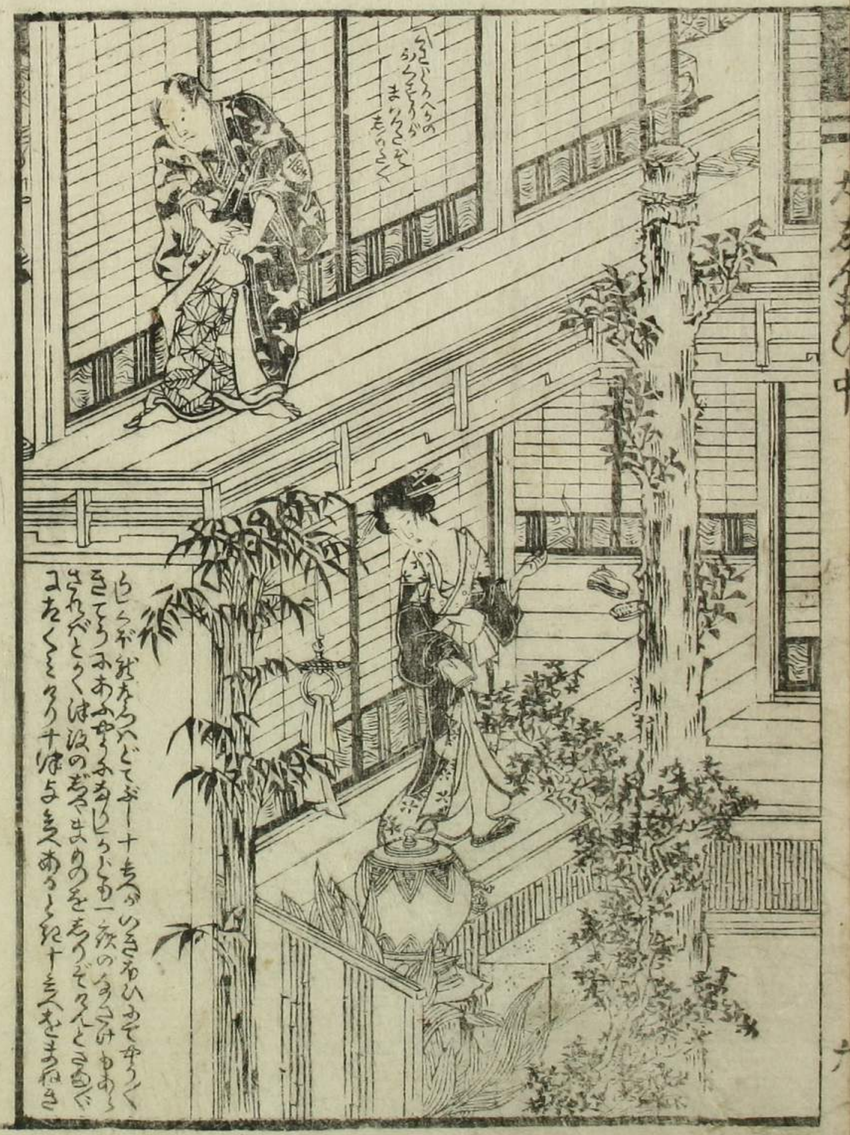
三ろくのさてろうそくぐれて猫をちやうあのしくれべあげ
ちろくろふおやうこと死もそををこえろくろふしー
男猫こうりひうしーもり男ねこの女ふうんのれしーるうごえ
らごそのよいねこのやうををうるみろやへもさのあ
とさえつぐろてろやの内へうりのりりーのれねとさえのあ
やうとあやーけれべふっとのうるさうちよくく
くことそのうくりくりさてうへつねよふびんをは
猫こうれべとろるおえのびとえ人のいさひもりるう
ねべうやへもさとぐるみろれしーねごうれどもそこさえあく
たぐびとさびいとそのぐくうりさてろうさけびてさちぐいのぐろく身をめざゆう
りしのぐくろくえさてろうさけびてさちぐいのぐろく身をめざゆう
かりやへもさとぐるおえのびとえ人のいさひもりるう
ねこうれべとろるおえのびとえ人のいさひもりるう
たぐびとさびいとそのぐくうりさてろうさけびてさちぐいのぐろく身をめざゆう
ねにろうやのうちよりかけうでくれべくぐるもうふ
あつとりのてうのねこをうろふるぐこえあゆうの
うちるふうをろろてうろやよりこうりのでくぐのうや
をうえてうろりさうけびてみさうくう

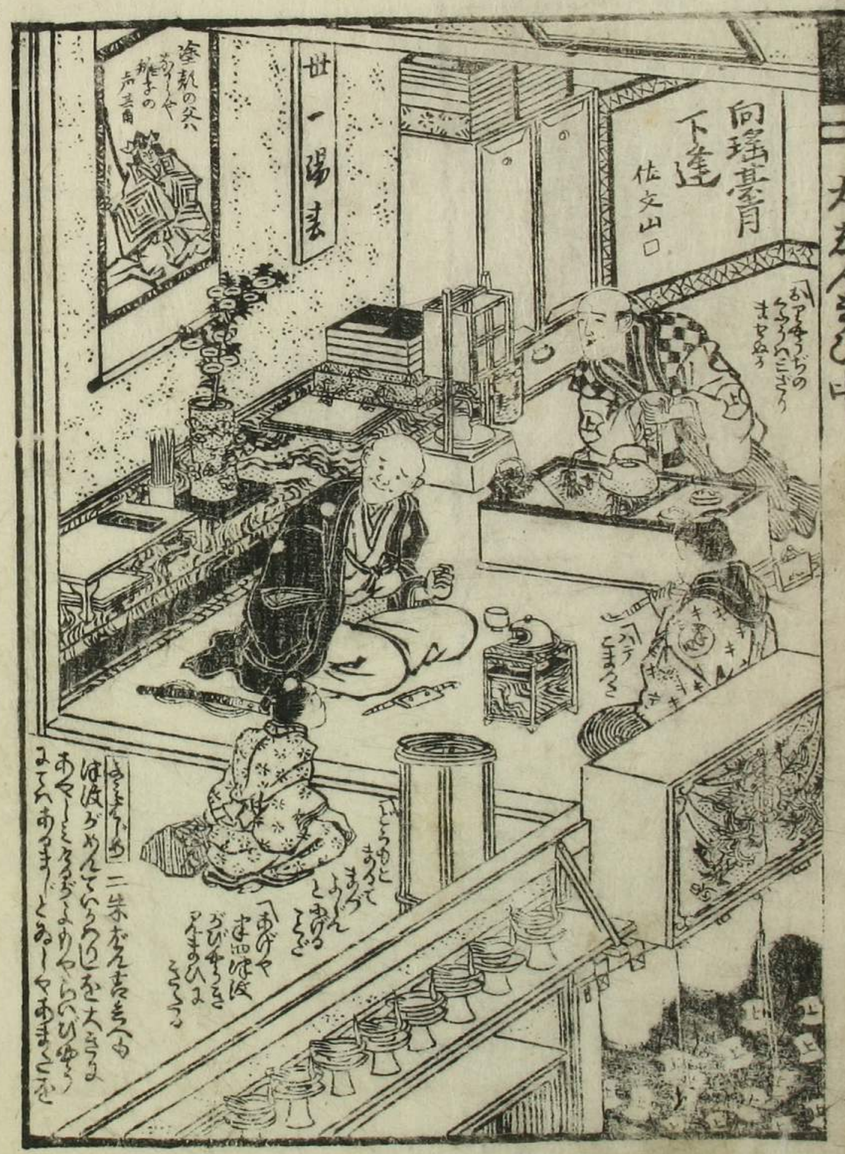
人ぐくれをおりふさてく男猫のえ
いれしよいあしぐさてうがちやうあのえ
ろえをもひてえあくまうろのうちもうべ
えてこしをさとうもあろがさえ
とろくろこうろうさえべうやの
也へのれざるくえへさてうぐあをあや
ぶくてりぐさしかありくべしちくちうあめ
づらしきかありくてものくえ
けりさてうもけねこふさくれし
るをよろこびちやうあのいぐえよま
さうくろさてえはばちぐんへえどう
の名とうじらぐもあげやまに今もぐ
らの大ろんをひとれぐてむしふかん
らをとりてすくれべをさてうのろとも
まにがさけをかんとくりけ狐こへ
京まちのこうくようあげやまちの
安にぐりくえ名もうぐぐどうのいし
ゆ名まへのし其角ゞ句ふ

京町の狐こ
かうのひくうあげや町
と吟じてうしもけうれ
ろうくある老人の
ものがたりき








向瑤臺月下逢
佐文山口
廿一陽去

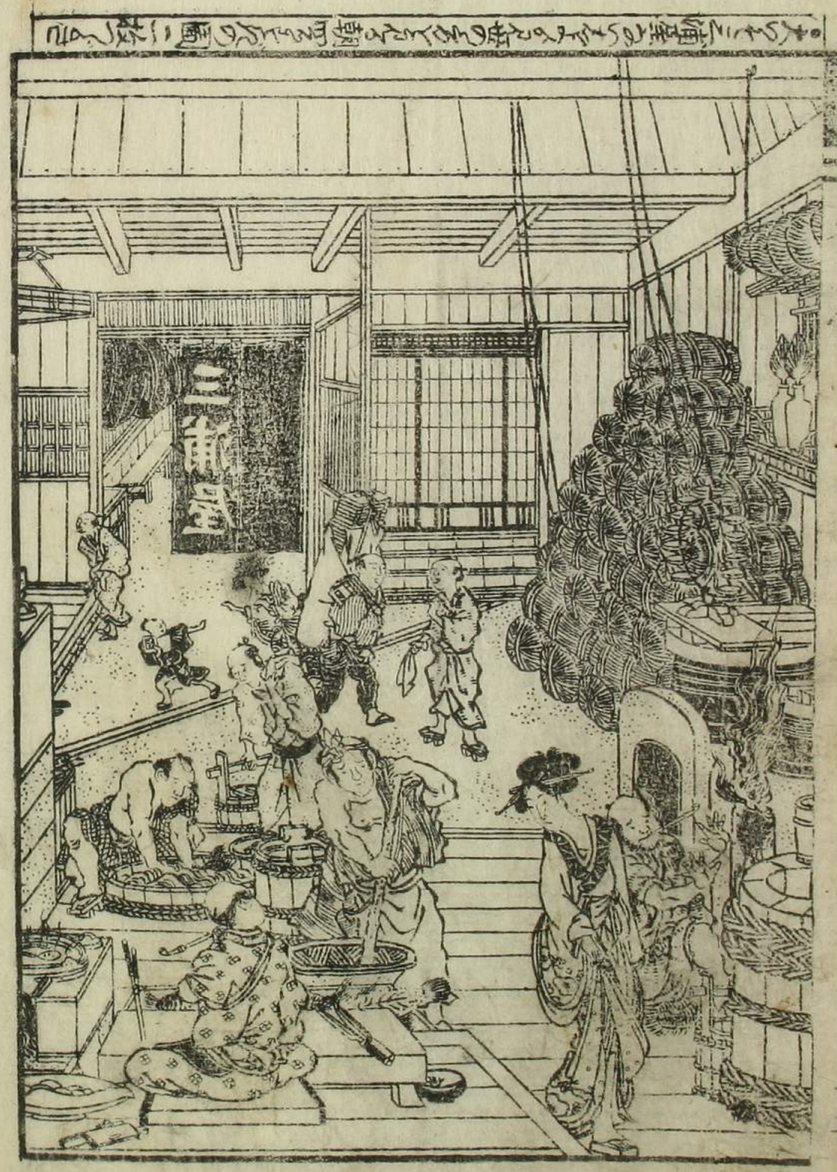

多勝亭

○こゝふ大のそのころ町よ三浦の長とのふのあうよへぐうとゆひまうの
かぐどおのりれどりてとゝてやへんを後生(ごしやう)おまとうねけてゐねのかけひき徒(ず)
る乃(だ)るまうる女房のえまうるひゆぐえんさちね人ぜうひ「こもんざうゝも
おのゝんちうゝふまごまおまうひをちるのねう世の一おへ花のかぐ「こそ
よゝ回でさへべんくおゝんまうでおきれそるちちをやおおお
まんまうぐゝうくきうりくまな男どもえんセかどのさうぢちんぐゝゆどのうゝうまうをの竹
えんのつくろひるまをそろふそひるまでふまひをれやまうまを
でとひぐゝこりや西よゆうぐのさうまぐろよまうるのう祝とふひられ
ちゝきそうさんでひくぐそよやひきついでふへのかく長作のおおく
みそのとがきれることのふむぎのこそふぢうふひのてまままう
そやフレとそうゝえねとそらとねまのぞコレくおへお主(てい)へあとの
こ紀来(きの)そゆけかうとゞ一升とうてこへうろども

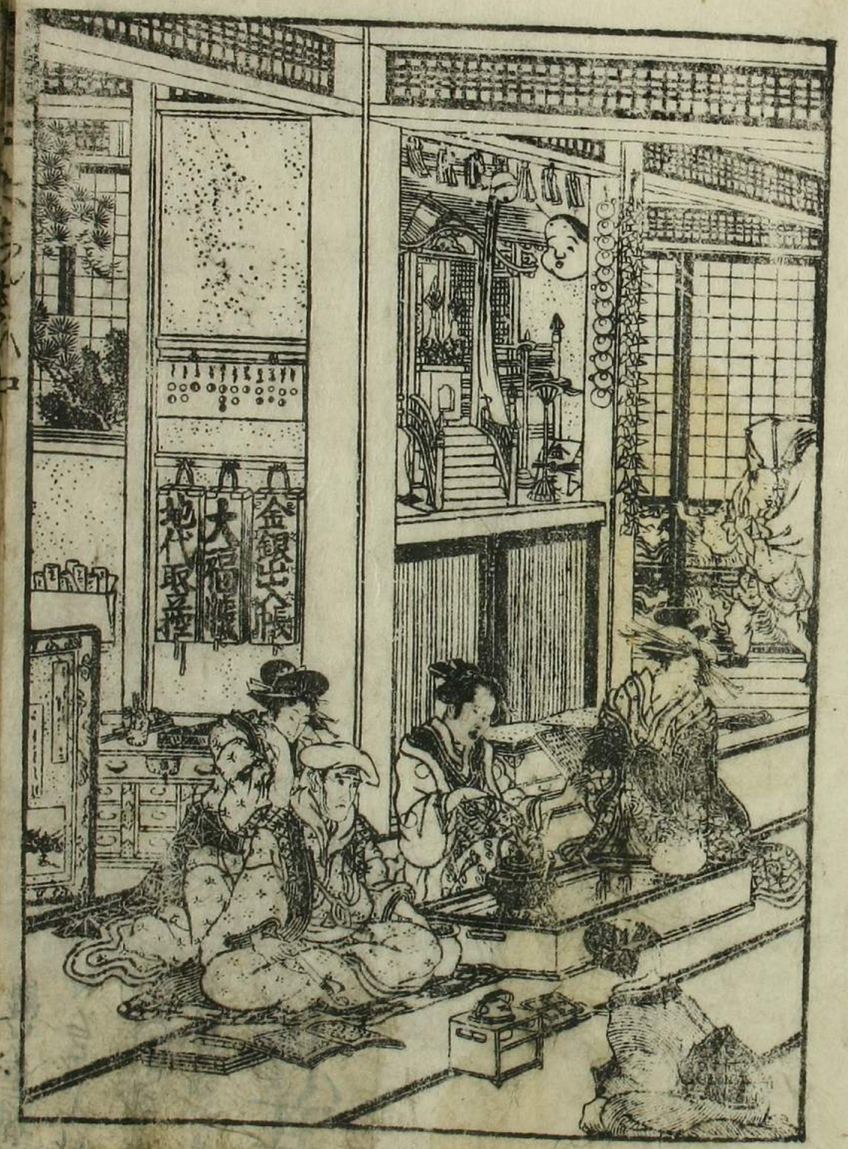
ほぐろりふきてもゝぐ祝ねけやこ申りてしもをふめがられてそうをを
えのぐゝせまのぞやこるのひはのこりがえうとあさうゝおんまで
一年中いわゝぐうも家の内とそうさおはこうしるかんえんふよ祝え
るきみゝふまゝぐさてばうゝ長いち申うこ申うとるえさてこかくりう
とてもおのるへいのねナゼうちとのりのをかうたの申うふ世ア申るぞ
はゝうゝうのへ主(ぬし)をたのこつふりのへ下人をちうゝこ申よ木ふをふる
ぐゝうかさ祢ふとぐるあさぐろもひとりへをてをね世のるきてハテ
久ふ一日でえをこと世の申でるおゞやらぬそふちまへどへあさともこ名
あさとのころゝあさろてもるふさへあへをえねう(ぬ)てちゝとゆ
だんもさセさそよいこかゝこりやかくゝく申ますいきてともるの
かんきんさるるゝゝみとけおぐんでみさがよへのへのとるさがその
とありのぐうちゝもえまぶゝをえぬて女そどもへけとめ
そまのろふまぶぐろひ下くへのゝのからこぐちもやうこのをるのある

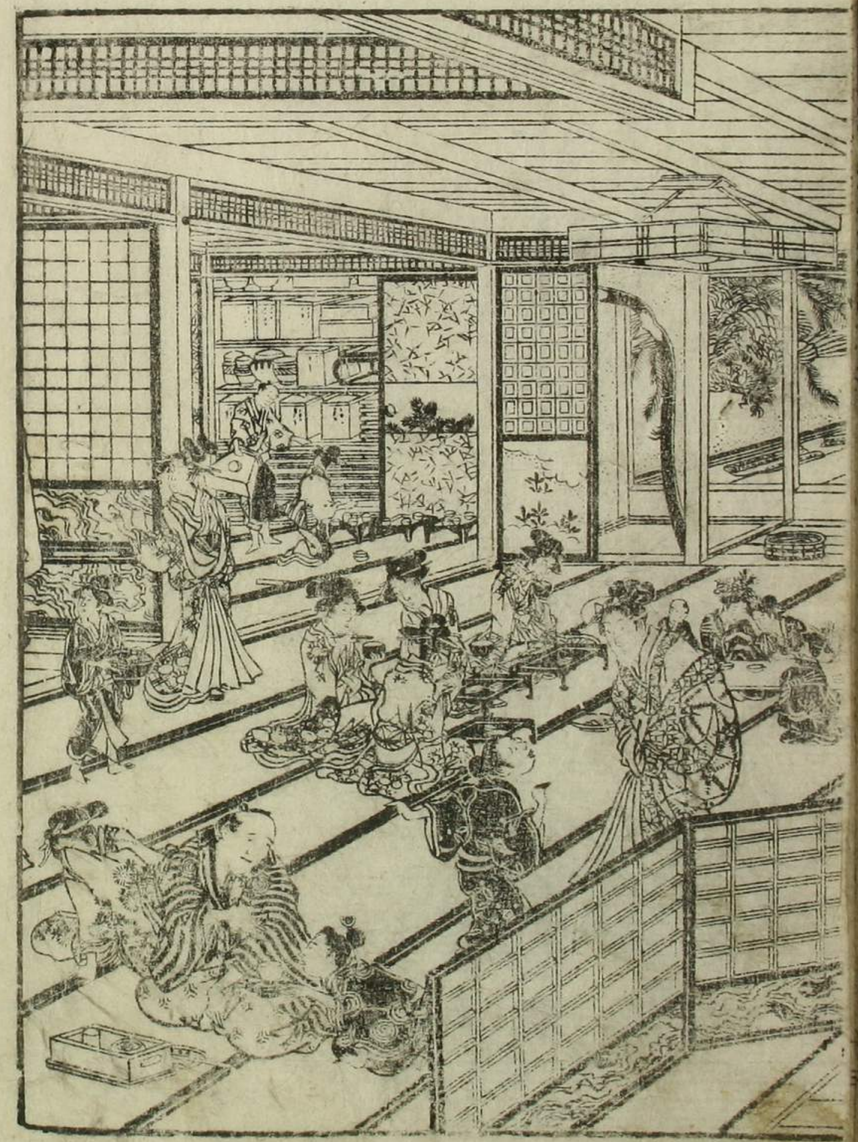
でかくれんぼうをしようとさそうのまごがこくとうにこそぶくみもを
がまわをしのもうもあれをぞこすてだまろて四のるかまりてうら
まへ碁でもうちふゆうちやもく「ゆうとそふてみるやくふ女房のほ
いたのまねさのつをうり座でかえさへ婿がのんぞとき母うのえちうふお生
で牛が川へまろてちんぞそのむらひふよろて今生で川が牛へまるさ
こうれさがてんのゆうねとろよさが今うよろこ女房どもがき母くしんよ
ろうくもさ死の世でちめはうこむらひ下くうそうこふせちはうるもさ死
の世でちめはうこむらひ比長が今女房のおうふおうるもあひ拙の
夜うくおぞるすみよくうそのむらひでうるあらうこれまつけても
のよく後生が大事くとうる門のにわうこう人のひへと泳ぎちま
十二三のはいつまごぞんとうのけのちくがれへぞんうるまのぞうく
おでちとおんまひのうろんてもれちんぞうるおまちさうで主母く
とをちらべ「きうふをうふをこ人がうなれびあーぶもせねふ治どのある

かくそくこちうよりちんぜうさへひれかーかうこ
ちくものでおうくかうそうきだんでもかくふえちてさうぐんさうーをおそこぬけの
おぎだんのうやじやぞや「ヤ」だんなそこぬけとうろうとひとうちのおれぜんある
さけちのまごうえちてびうろうさをまちよろコリやおくさうくちるあいの
をのうやく「アイとのらくてのきるちんがいくとうで「このえのまれ
れくでくみてくるさおもいゆうーなさんまぜとおいけうこれれ
かれうるち「女房えるようおつうづくそぐくとひこな治の
たくちうとえうあるうせうちうまとおいちくおひとへいろ
じやうム十二おへをくるしのまれぞれぞうりちうちやぐく
いやうそぐねばとええてちやがのをだれうちおやうかへ
せうるまうくうもぞがかおのぐるうまきよべみーやのうこはいの
おいーちうのさぞへうんちぞうけ到さくちうるまうくうれこうさと




火用心


金銀出入帳
大福帳
地代取立帳



大國屋

今ニ年をととろふまで十年がゝをみ十あこうろへちん二百疋
サァうろまへことわ〳〵ぐれべへだんなをんこてふつれてきこかうこうへ
お目ふとゐれべまぐ妹金志ゝ　十さねるへとろ〳〵ねけっふへおや判
うけ判のおゝてぐちるへぐうけふうけをえて
さへこどぐちのけ志ゑうぐへ判のるへのものを縁かゝえうさてへ代物へ
おこてぢやの「へいやくりろ〳〵ちるへちるへとるへち
おやりへへ下絵の四帖子浦おひたがごけの娘でござうまこおやりと
たゝうふおりるぐ〳〵うけ判おや判のるへとヤをさへおをうけあ
てけそ〳〵ちやがおるれまの〳〵さおやひとうみひとり一りんえんごやの
きれそ〳〵もへく木〳〵ちこさるとへふびんなけみの身の上うさ
う〳〵うとろへひそうふはまおりねをおうこうさやてられとろへくの
たのくりのぐうりろとももるうけをきゝとくけ町家へ年まるる
みとろへどそのぶんてへ金ぐとぐかどとりふてるやうけもるへけま

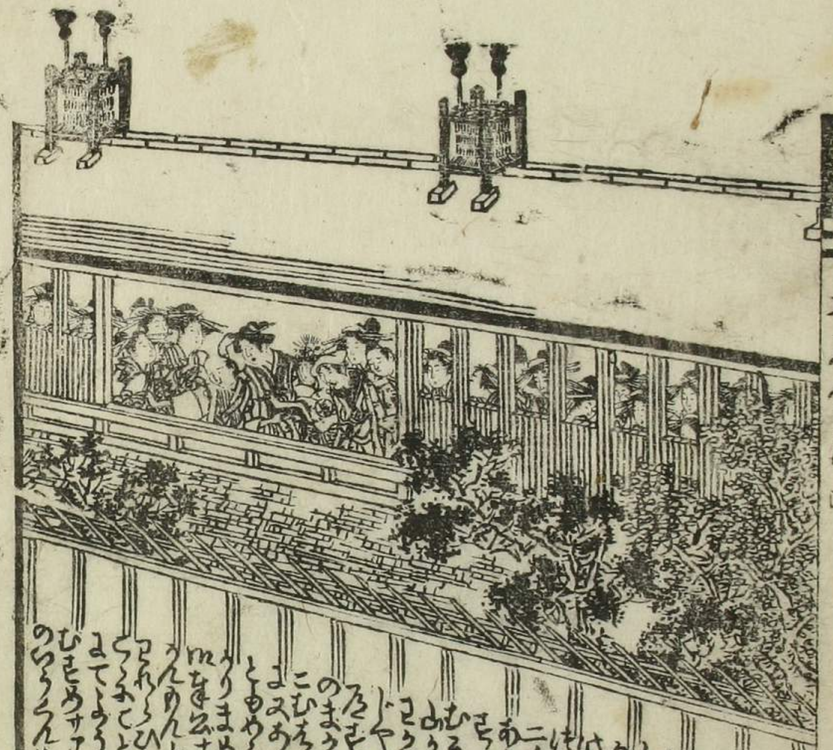
大國屋

按女あへさうもへ〳〵ぢどすへくて、おうれどもえうさあまろてたのごへく
所座どのうろりへぐのぐ〳〵ちへ〳〵ちへ〳〵ちへ〳〵ちへ〳〵ちへ〳〵ちへ
りのてへ〳〵せハかとまがうんごまうもれぞんのおゆへ〳〵ちへ〳〵ちへ
ちるる正直ふひをまがうんごまうもれぞんのおゆへ〳〵ちへ〳〵ちへ
うのろうめてりれら一人きうひそうしてごちんぞさるアよへをみ人
じやがの外へるえをてそんまをうこと初もう不のりろふるもりろり
もへぢどろえふくりへおく目ぐられあてのぐへきくりけこ江ん
どのうへぐひるへとるこ一列でかゝもるともかるうぢと外へんをまへ
ぞやサテへかへさるへ人みさへられてちんでうへどゝやかをへうろうのう
ちうへ什ゃうふ娘をのとうへてちんでゆくるやごろさぞまうふてね
らへでおろこれりのへさうごんどやみ十あの四十あもまけうへ
ちんご人のつへぜんみもりさうるりのうふ江ひどの四十あでどう
じやの八テ歩一をとるちるをへへられへのかけ合とてられそ

のなさん仕ぶりくべれうふ一ちんのよろのもの〳〵ごとみす
あを一ぬもぬきくのごまあいさんこあくろう道とぐうもりみとろり
ごろんぞさるかくづ〳〵ぐひろぐんどもさとぐく女どやぢごくの鬼
れどんむごくもるの人山掛(えんしう)をまうろえてへよれどのけうこうごん
みたんなさるかさりちのあるご如来うちあけてれふうあくるばげ
きゃー〳〵やとおりられべとるぐたくふるをはこくやだんなさるれちん
ぞさるるむづ也をごうきのそれさうまをろうがくさるのくまお
うろさくさんごのことけへやうまをあうてやされだらまんのさん(の)也
みんりとゆうちよある侍のとをえうんどもちさんへあうて二つのと〳〵
ちくおやふるごんのつ〳〵おやみかけてる一すんふうの
きゃー〳〵やとおりられべとるぐたくふるをはこくやだんなさるれちん
ぞさるるむづ也をごうきのそれさうまをろうがくさるのくまお
うろさくさんごのことけへやうまをあうてやされだらまんのさん(の)也
みんりとゆうちよある侍のとをえうんどもちさんへあうて二つのと〳〵
ちくおやふるごんのつ〳〵おやみかけてる一すんふうの
ちうんセもん風のたうろうのうちをきけべ今てくおやへさどごる
とのふところおのうりくのとろどきとるりのまごおごくのふと
きけどども日本のくふをごんふけをくがまづ〳〵三月のびんなさ

たべねりてあひも。あうセもるるかるつと。だセうをくとあくる
月日もそふえるさせのつぎのちて。ふとともるべ。あとよみうひさると。
れうられふるりかうう。一人のあねをもたづねて。けうごんのうちふふ
みるやうふ。えそごろるりのあ。あうつもふ月をうろう。ふえや
そうえう。セんと。あんじるくうーえだくのごさごう。とてもや
とけふかえるまど。くけんの中おもたまひかうふのるあ〳〵ぐ。
多かえるれね。ふばうセもじん。てかうえ。イヤニうえうちもうのさく
あうふ。おうさひとうのてあやをたづ称られねるもかのるそれうと
らひえううごや。りのふのおうねるそ。ひけうえれうのまをのう
ねと。そをごくと多ぶるひ。かるーやつひふ犯ふ申ーねと
多をふー。こがれるねあうう「ぎやくんふつるちやをそえ女ら犯
ごさうごづらく。うらまくふ。ふきうもうえごのやうふ。うるふく
ー。かえ人たでもあうね。ふばどのどうとくえれて







○それへさてもさけうざくぶんのけの中くもー　あさを大どんへは波うあく
びやうをふびんおもへばあさ夕人用のおくをおろうてまことをつく
うへあらうるがけ二人へこれいろるることぞやちやうあへふう紀浦里を
ふびき」てべろそうふむうまーかり」おうう里ふと風の
てちとおあてそうちぞうてあの世のえびのどうちうとぐる西方のそやがむうひふそと
ざうてあの世のえびのどうちうとぐる西方のそやがむうひふそと
のうてなのおろせざさへそくく十万おくぐのあげやへおへさねぐの
あーさのはもゆえのそうとうセられべおさ尾へあへぎのおわひふ
ちづこかへりうくらうくうーてがんのうのくもきおおひちんおよの
月のえげくりうろーう如もそぐんぐこうらむうさ紀のそちまた
ーて人目志のぞやくーかうぐへるれこぐつまをえ衣ることのおそで
うちかけてかへどうちあんとおづまをとうそと八めん」のどうちう
とぐこ「アくおれおそえへこれえかぐやふ名とうの

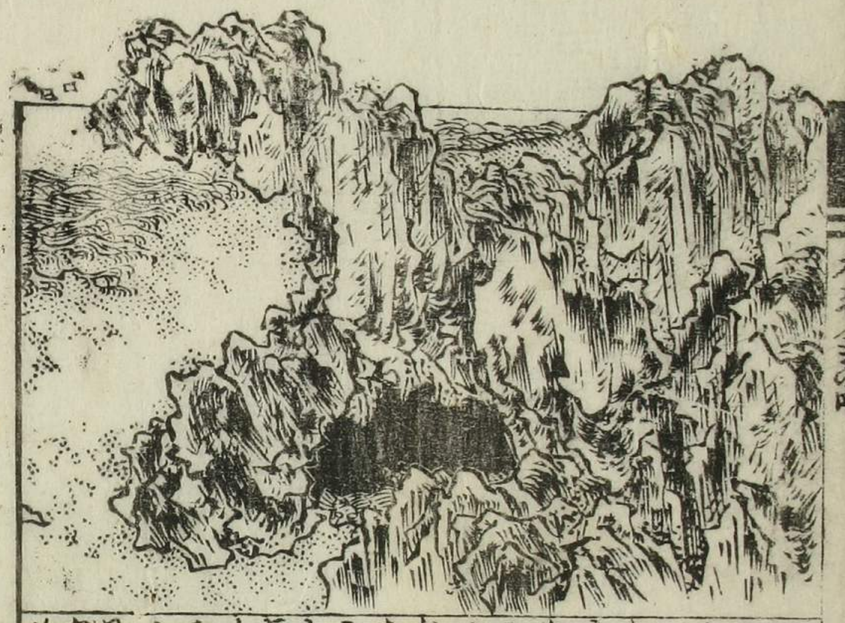
ちへらんぜんセのおうこぶうこもおさ浦ざこのささるの乃舟とぐく
おぐまんとて、うれらるこのおんぐまひ、とうんぞおきやあこまろ、
青柳までぐりちまへの、あぢをやりをるその舟ふうれをまねくや
尾花がまねくこぐくおお秋をとれ、その日よへさてありぐるの
茶屋やあげ屋のろる目がつくーや、ーまぐうーのひと目はくこの
八町もえうう柳えうこねうつくろひもうれ長坂、ふんぐんワぐこお十けん、ー世へかりのあげや
あて、かをうびんぐのまひみの紬、ひらりくひーくと、ひーうめれてうり
らるへ、ちるこうごんの紙ぞるう、みセとぐ紀のをうのあんぐく、こま
げさのおとちんおをと通、やりてあつくりの、ふうをさ紀へ
つれて、めめのおさろのごらいうう、あうありぐやたふとやなごちう
ぐんとおぐうんと、さへさりるぐうぐ里ぐこのむし、むりるぐら
おちうれて、夜さうるげきーその紬へあーとねもあり

つるが。今のうた紀多のうきやひ。あひうやそうとうぢぬれど。たへ
ゑまこうんふ角のふこ。あうねえみ〳〵うう〳〵やうつふまうのふうふの
多ひさ〳〵のをれう木のはう〳〵とうとそのへやおうよりけうう〳〵〳〵〳〵
あ〳〵おく。おう〳〵やく〳〵心うう九うとかわれども。ひとうごくらくうう
のまく〳〵。あ〳〵ごおよらののあんうこふ。ちうさんとよたうとおくうれ
いてお。そ〳〵ごふをれくあるでとるり。ナレトどうじやけうう。さ〳〵
ちんひうう。どうもくとわやうううろ。ちざ〳〵ちんのいとあ〳〵べ
ひく〳〵さ〳〵ちんへあうねども。あうるへあやのをちようも。かねのをち
とぞたう〳〵れる「こんぢさへのをだんなのありさん人のうる目もうぢ
ゆひ。サアあうとのさむれども。あげやまにぐひくるもちらべ。くる
つねんもあ〳〵るひ。うるひ人ふうんさうれて。うるくうるうをうろへ
ゆく。よそのうる目もあうる。
○こうふへあげやまに三条判吉うへあさ尾はつ没がとうたてあて

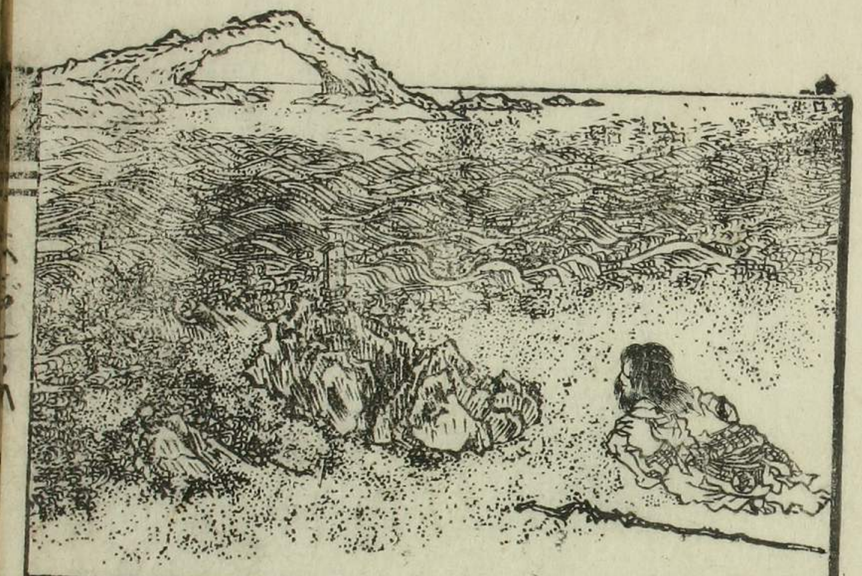
のへうれどあうへ〳〵れべまことふ大ちんの人ありその元へもうんびやうを
うれひうへべうふ田ていあんぶくさセヤうとてさ〳〵との國大山不動
明もふきちのをかけ一七日があのごだんをほていちうれへ
げふ方田セうるりのどもうりさてみどんを大どんへ十はよ与へべえ
かりとみてどでぶ〳〵十与へをたのへ与ものびようくはぶそちらへびやうへ
ちうるをよろこひりそやけようのへうの九帳は没ふあのさうをはちし
てこうれふるひくるんとてふまで日でとふかようどもちうぶふぶつも
ちれわうをきこうへはぶんぢうんびやうをうぶへのみのくらうみて
ぶくあとやきどくのえゆうとあてぶふちづむむのそころへ人ふ
あひもセでおうねへふおもつうぶんをたんぢとのおどのあげ
づわうるえびくふうやつらやといぐぐさ〳〵こむむなさんのの
あゑくのおさまるひまもう〳〵

○ふあれをりよみちるひとつのりのざうありせうりんとぢて年
月をおくり。とぶうをえざんば時のうつるをもしらまく
ぞ。あんくるあんじふおうさざれば。衣くんざんふあうえざれば。
をざへげうろとおくろくう。そるやむう〜のそるそ〜ねとけうの
そ〜へへうく〜ぞや。うねてとちげるうさのそら。やく〜むをなでくる
ぞとそひ。ちそふ〜むふ秋をろう。つれるね月日の身ふはうり
くる。きのふへおく〜ざんふめのぎふくをえて。なふへるんざんふあ〜を
きら邑。うき世へへんうるをもくも。るぐさむるのあ〜べとそ。
うしろひまこう志ろうのめの。なさけのひふいのちをつるぎりのえ
のうとさけぎねたう。さるがらめうこうとうさの松岸（まつぎし）長庄（ながしょう）邑
景高（かげたか）と。むう〜のうぞ名をわづふ。そふもうるねあ〜やや。
こおく〜のつるふよろくと。ろおひのろおふたぐうる。くびふ
かけ。るふくろをひ〜き。ふ〜ねのはくみふうやく〜き。ねをいを

ひぐてのろふとそえがうぐをせふしるむ妙ぎんのん蓮
光大（こうだい）下。俗名佐系のおうるうるもうねうんぐうんちげそち公（こう）とんーをうびぐくとと
君ハこととくをう系のひしゐんあてまままびうぎねそれに
をとち申うあいくさう邑ふ君うせあひーれあとあてれちあ邑十郎
君。れかくわくれーうど。系のどんざんーやえびこうて。おほうとくく
とれざけられ。あんこ系紙えうるハ対ふせうるぐうちろーやのちゆん。
えるるふひうぶ結たろうがざんぐんふてつひあハせろーやもれかんき
ろうぶり。けんぞくろとうふまふあひーうど。ふぐこあんとのそれび
君をちもにをまんと。ろくがとざとろを（ぼう）へ
そるれぞてう邑の浦ふかくれをと邑がぶーのらうあんとささあ
うびよそるびうのろもごもあぶつるーとう系てこの邑とるる
どうをさいうひやふ申ひちと名をあ〜たあ。てう邑の浦ふ



さるのいしふごんねへの我をうるやもセうーやさ
らじるのんと四ツ半うをふおとうら四ツおどおとおと
もるおつくふおとさんけそまりとををうーて
ころーどさめうーうのいきがちさら四ごうふごうを
えとうのてもおんとそふのち神んのさかまーねへ
まずうーてんのやうかんおもつきえそうるうくち
をうやと身をうねつありことぶーをおごうらく
るいおごうをおおり四ごハヲふうくのくりこと今
れやちさおかんねへの神うえびこれがらさをの
かげようえあつでさそかるーくもごんねんおも
るおをとらんよう一人ともあれセうーや一人あん
そをおおうてもおごをるとおへ紙をうおぐめ
うーて猫のじんの神うがうかうべをうくれ紙
長久をえうーんとへんろべどもいおふういさき流
人のけ身ゆうとんれ四人のセいひうをねがひおつで
あいこんのまうぐををたれおひセうーやが
ろやめんをいのりの人今日ハてとふれやへうち
れやうさおえれつごんさごーうぐセうーやも
セおてうきのころうる身のおんごうへおんん
めえんのうめとぞんごんどいおりのうちへ



セうーやがふご神のふーおおそれをぞんどて
けぞをセおうセうごんのぶうごんとうら四ごおん
ねえんをのぐーけのいをねうぐふそおえそまうる
おーきおきうよぐのうさへぶつ七ス二ス八ス二
ともうのさセえーとへうへのうふ世おををこうぶる
ともるぶうこおうれてうこ四ごてさぐるおどの
たようもおくひろぶひうぬのかぐごを四ごお
とちのうひおの神のをうきおをのをれそー
世のおうゆきのおさ四ごやと大地おどうど
身をおげふーきくへおれぞごえをあげ
ぜんどもおうぐどおきうやる世のセのをへのぜへ
るきおをれれうおうれくそふへもおぎさよ
そるさうへのおと浦山風ふ声そてうへうの
ひ神四ごおねつおぐ吉さへへとそれねえへ
をおくふくろおのれをうさぐうさーほ
おくふおといおりふうくれへられんーををあげ
をえつけてやくくりのとうんと神ばをよへ
焔をのこうりのをぎてみよりかけあげれへ
焔がおれをふきうぐ四つまづきよろうふる
そーをよう「コレとうぎどのけおおれら四ご





かいもるざさのさよちどろ
とん ちぐふてわちぐるを泳ぐ
ふまろびおきまろん松屋松にかげろうのさらごのおとろろく
ホどをろんてろどとあろくれば里人たきふきるを迎「イヤハヤそさう
とてこれふ上てをそさうもるホーけとろくまるみてねふろる
ワーうあふのうわくのこつどさんふろ「さればこのめうらふとるん
をそびかりなのーねそびさのひつまちをるりの引合をとふうセん
とさくをたようふのそくことりとのところふさちろる「まるくかけ
たうちんをろ松屋氏へれ出さう.りのヤさんとよをられべりろうん
ワーやのうちみて「かましくふるヨふをヒひなづるの.あやかなれ
どとそでて.ちさとをかけ.たびねきてちくよとるけど身をを
ちてこれろこんをとうのつる.そうろうをろとんちヒ.今べべ
世ふるさりのと.やんわくるこころ「きを松屋氏にかけさうと

よびべとれみとこさふべさうちろうくろのきろしまみふみかんぞくを
もこさをろろあーうそーうちやとうべさてのもそごめひきちびさろうつふもろう
ーとろてきのでーがとところふもとこをふぐろれふちあろうごくみれくまれ
やとりのるうべひとろふめろるでかろ
るる多のうもとろてそうあーくのひとなゆーあ「ませ
とかうべをさげて回ふめつるぐ焼へそんぞとさくろふ「るろろ
かーやれ多がろめるとくさるのーのまふおがろれのうう城
るくととてもそーとるべなたぐ松きヒホ焼ようさふびんやと
ひとろちろろくとげふるろうさんぜんねどどろふくふほくかく
さもろひーとどうつてるをれべちもまするでさとうロび
みのうホをひと回そさげふゆびでまぶさをひろぞろもう.ホふ
まふふめうめのをのやふかきれてぜごもいうどろえそろが
さてもく世のやふちぞれどありべさきめるーひとろの

大國屋庄右衛

大國屋
庄右衛門

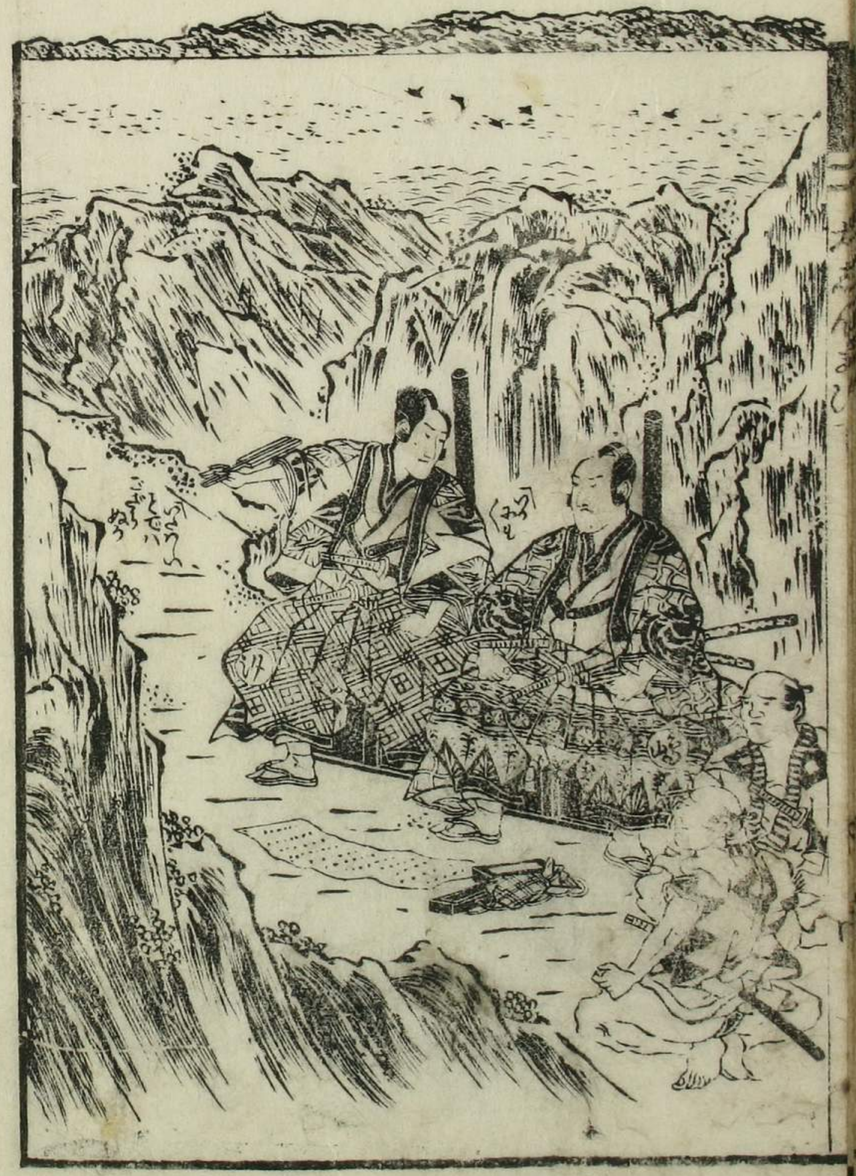
昔噂花街始業之下

江戸 式亭三馬編

大國屋
庄右衛門















をどりうたよてみそ巳を二朱をんいよかげよりのけてとえてげう
てんにどてぶ〳〵十をえをところ〳〵てえくごろ〳〵のこのれどいうぶせん
ときさうげ、十をえあうけおのくさうぎみな、おさ毛どのに紀
ざ〳〵ふてだおろう〳〵る十をえるれべくごろ〳〵のはこみすー、けをえくうけ
これざ〳〵でおろうのののひことけ、ひとをうのがさくんおのくよくき
うれよおのくものそるごく、おこかろ山ようれあをさ巳これるるが
そのむう〳〵かろこえ十はよをえがこーおとるり巳をそれげ〳〵ゆえ
おかんそんー〵てつひおく京のゆことまで、角をろあるうれとく
月、おうるふおうそべ丁はよをえのさうけおて、くるう氏のご毛のうまの
ふう盛、これひとくふよをえごのくたおんそれべ、なるおてもそむ巳と
たのこの一京、どうけあひ〳〵人男のうきぢ、かのよをえくとんさたごんふ
大ろんあるゆ京、こう〳〵のさてうが京のあこはの回波こととわざ
くんこう、かをうくとひそうのたのこ、いうくんおんあるかをー〵ふたうご

へいとうふごくかくをどひをくめちひて今のらいの必要アのんこいうや
おうごしや、男をたてるどてふー、女おるくうこーねけうさとうれ
でかうくねそのひくひどんもおうそのそろうふうとたくよりおもそうあるさんと
ふうひーふせん巳つあうるこんおちらで今、は波どのとえ対ぶんのあこえ
ろひーふせん巳つあうるこんおちらで今、は波どのとえ対ぶんのあこえ
どの礼つえざ〳〵でおろうちうるべとうもうれさどねんをそうこを
やさんこう、えをくうどろへいのどくやくをこちぐくみひとうの姉菜
あう、巳の年月日時そう巳男るみのの礼ざもとれれいをこうやうふ
治をとのる、まうのとねてかくごせー、それがーがんぜうん
巳の年月巳の日時、さるふおろてはちろうんうえあこせーは波
どのくおんとあうくてつあろうんうえあこせーは波
とりそそのまひの指をさうまよおやとくとかうふいて、
そびめてさうじまひのこんげんさてんとおどろくだうろう





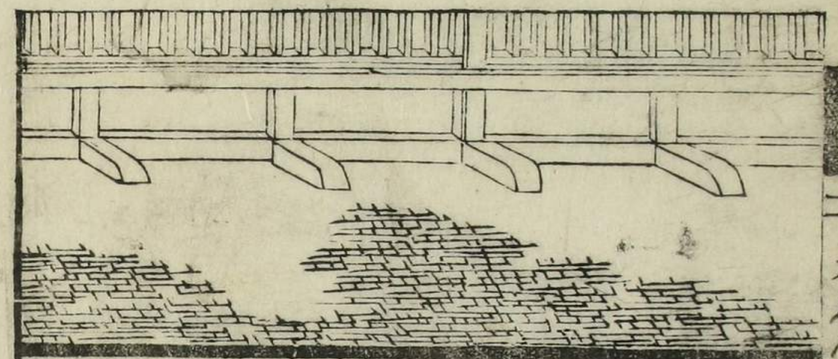
二朱ぎんいくさにくみおちちうあしかうごをまおとうあげてろくとえ
「ハテあーぎやこびれぎてのうる
以潔氏と名のる武士のもてあ二ひきを
けかうごへのもろうあびいらびかーさよとわうがいたたのまおね
え合とかを「おういうおもそれぐへんのの七十えとやもとの父へいめへ
东西武士のもの为るかふとうぞおもうる
アまおえうちじふーてのへぐろらく兄弟二人の将六二人のうをがまふ
ころれ」ゆえかんてのへもうざんども三のにだぐのころうかうごへろうそ
あおうえ流兄弟のもの为るうあよべーまろごふさし うをがゆの
ごんさえへ对おありるうりれへ兄のの七十ろうんまさろうとかされ
十えよこをとうちめびしれ兄のかそ三のきだぐのかうごへおて今
えそびめのえおさそ ぞと兄弟をおをとりかうー ろうえとく
おおよびくりは流おうさおかえちんー男をとうく十えどのあうそれの

いさぢかんぐへると泡のやようまあの十えくろ二のえじふかれ切ぐ
切をようをとうへきつえいろのさせーのれぎものをのざうけとうをよと
をおうとせびは没とうてあーのさぐれのえとくいうえとえろがみさ
おうふおろうら」ゆくアれ氏ぞうおろえるとひとくく今までろうー
らのびゆうのかげもうえちもあーふーきやめーのぐくふのえてぐう
十えくうきてくをとあのセるむあえぐぶつとるふる声二朱ぎん
は没りえともおるむあえぐぶつとえやアそうのそのおへ
十えくが妻かえふうやおそーとかけまうをみのおとうつきうれ
まづむの目もあそられぬありさまろうかえふいとぐうあつとろう
もそえく丈ーのなりのおまごどえむかーのうちかけりかたうえてをこの
衣とかうる身のあのれをえろーねあさ尾大ぐんつさぐーさえふをえうげ
えぐれうえみてあるえゆく世のありさまこそぜへるみん
○うふむざんるいこ浦のさちあうが卵のようう。糸ーれくふおくぐれて










あげやまばばぜんこもろ
ばゞあげぶせのこん

「おけぶせの　かんぞんへ
　はば　さるのおくのつん
　おいちやら　半四がひざの
　みのちやうちやうとろそ
　そのあつもりきせう

「捕伏の捕り
あくれば津波が文
常用禅門自若
とうて金陳
はね六ツ過ぎ

「未曰二朱ぶんきまつぶき

「津波さわと
つひそうこ
おけぶせの
だれかとるへ
ごかんきよさま
こうのどうし
どろろの
おきれが
そぶうぐろ

「まことのは波かどうりぶう

「きろ
うとぶ
そりこそ
ふうう
とんび
おけぶせが
おやちよろ
ほこれい
しう

さてうあとうう

「武まへの
津波
え

「ごろごろぴしやぐわらぐわら

「この
たまらぬ
ふびん
やつこ

「猫の

「ごもさま
えろ
ろう
おそやくや

大國屋

まの日まのよのさくがうへかうてくるうぬをぞ。けさうるこのくぐや
そぢをみけぶ日ふあへさこのみ。かんどうのとるのみれ。さふひかのふ
さちかゝちてく一生がさるろとろひおとかゝとぶく。うるふまて
あれをかうてふあけぶせふーてうぐさんとさえくさのんでこたをよ
うるえあけくまのうぎぐんふらるうのおけふせ。からざへつちぐみひえ
あぐか。あーかをうんで私うろそえぬ。これでもうろうるひをとまる
むかなのかへそ。ふれかどうよくくなりのじやなァと声うちうるへうろ
る紀は汝きてうへきえのるちひ二朱をんへうちくとちよぐり如てぞ
ええおる。は汝へまりちぶさろふて。かろさふなのおやちさる。ごゆる
されてかさうませ。かうのふるすとちるおうべかくざとぞさくふさざ
まれても。ふえのさしてお紀まやうふ者。おやくさそ
おそろうが色さでござうまもう「イヤそろくたろぬ。ろろのりのけとーじや
りのとうふーへうるろくとでるえとやふろろ。ごうりふ有うちの

大國屋

そろうぶ己さてんさろうくおへそうやとるおれがちるるじやとうふお汝
汝へふんのまおこるる私がるるへうる。とうをろ
「イヤヤつうぐんなさる。ろうをろ
きんてうぐ。とつるろーへもまくさるのおやごの代ふつうをほて。ちる
をへこやとり。おまくのまぐ三りのとれ。おやぐるへかん大病のまへの
とるふお私をまろうりくもびなされ。代のおまるうちふろ
がーおうねおえてこがある。せがれをりうてせらてさせ。汝の河汝とこ
のへーてられとろへがけなさおこのこゆる。かぬまーこちうをんぶのうふ
うけてこやうぶ。おうれーさうふおれをおがくくのかうえちろ。とのおかう
ちんこえおちくろうてのごようらく。うむさへ人うるくべちふつう
ときぐんとう。ふおやぢぶおとなげるの。ふるやちのとでイヨ図十そ
まうおやくとそれへくうくせのかづうへかんのむーがあるまれべまさ
けうふ。おうそうろもつがうるう。やーられーやみねんうろ

ふたごかふなをあるさとりる ものもち ことつきざるぬのてかづくこりち
そくらぐんてうせんととるお半国おるしるう「ごんなどみ」コリや伯のさされ
まさとそのさんてうあづうりまさそ
さらくぐもさうかのれうくられるありのじやござうませぬ。者たのござう
おせられてらさせのりんやくぬるいされる多おちおて
てんみるんとせねもどうぜん。おさうぶ。けらうらで名のたうの法波大じん
さま。おうもさてござおようみるんをきるてかさうほ」さその正をる
ぬがあるべ今せいりん」とさくゆんるることりつくなるやうや
ざうのおわいりのでやぐる。どこふうううもものやふ。さうぶりこと
おつけて。ヨケのコろへとのうれぬやリふナコ二朱どのと申う。歩判
どのとそうさそめんどうでござらう。イヤホシニちまどの母がなるやぢ
ともおじうらうぶ。これをりのへあるやの母くる。みうあいござうしやくんこる
さまのやくるやどやりのるんのあんろうろへまちよ。おそべいろう目が

ころさうるよろうどうぶ弟一ごやコレその目のころへあくのおぐさうさるの
おうちやとうぐよいげる。イヤざんないやぐる。
どの。さぐそうろうあくで通でものん
上る。つ名のうちまよーめとさあう。ぐうもなさけもおもうる。らうづさん
のさといあやだ。つろさそろさ紀男あく。二朱判まなん必ぬて。さんせその
かごととうよせ。ム。と付ん必常夫
がおや常宗。かごふのうるうろのぐろんぶんとかごふうちのう
「イヤコレ波三あくくろて今日よりう
もう。との二通とろてあけとさ
て「ヤアこれ。これあげ代金のうけ
ろうけのーやうん「さうやれのんさよのあさぶで「さてう「波さん
「そうろこの名うけおさんである「コリや。それもそれおちぶその名ん
これかごそれと常宗ハおをとあろしてイヤコあげやのれてのーも

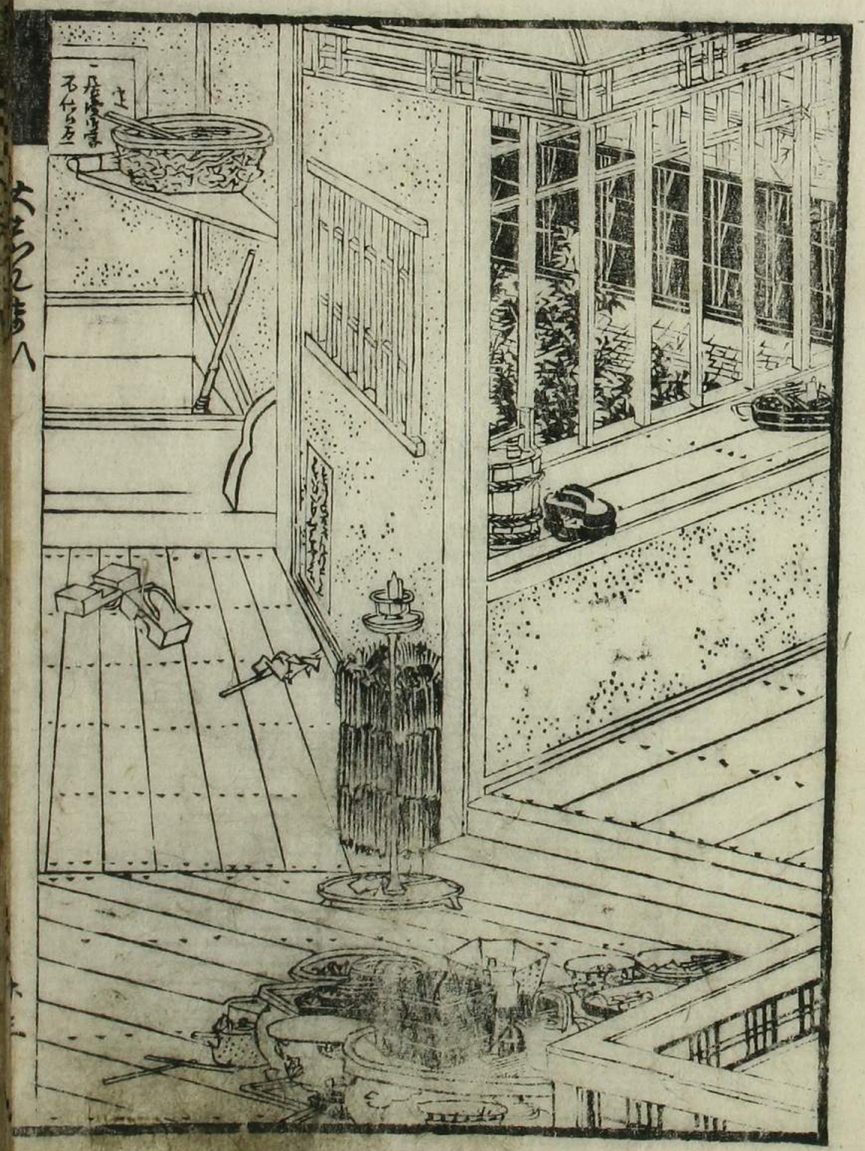
きてうを　ゑうけのそなむけ　どんを　こゝへ　のこしおく　その　代官の
そくさのかむはこうぎの　ゆゑ　大こんと　かうこぞこちらへ　こゝへ　さるもの
何ひ　今も　おこんまひどんを　大どん　まうあのよ　こちらの　さてうと　ゑ
うけそろどんを　こゝなわるひ　この　代官まで　おそて　おげや
まだ　ふこざさうと　うちみんくれと　ちうも　さう　二朱　判あうと　との
つぎへうんと　きてうさま　をさまる　のやぢさるでんなひうの　とえ
とのさぎの　をぬうれと　大あせぬぐんが　あげやまだへ　あうゆうん
常宗さるが　ふかうをると　代まだ　をおさのさ　それゆえ
ぜひちくちうへ　ぬうそへ　そんぶん
死んでみること　ちちふのひくどの　きくこと　二朱ぎん　古そくこうそ　やく
姑汲さる　ちまさんを　をぜひ　ぬうへ　あげやまだへ　ゆもさう　この
二朱判らが　せのうれでと　ちくれうんを　ゆうまへ　ぜよさきうう
さるを　とおりや　ひきとろごちんぞさま　あくうれへ　やとよろこびお

これてきてうが　目の　ゆまひ　ぜんぶに　さるいうひざけ　むうへの　姑汲
大どんと　ふこぜひ　おのくるこの　おそび　一世一友の　ぜんぜうふ　こがみの
ちまを　をぞさうせる
○さてもそのちもさうそ　弥次ちまが　かのうちあて　ちんちくえ　共
にちうふめぐりあひ　くうんを　のこへおきて　大らそこ浦へ　ゆどうし
うべある　ぐふうふよろこび　弥次ちまを　もあつくもてなし
えしくう　さてもさうふの大きうれべいうゆうの
これをみともにことぞぐと　弥次ども　こうらの　長ちみなやあう
うえ　おぐそのまくみさうおれぬ　ちるふるこれさてうがぶろ
病まあてんをくうきひうぶうを　さのさうれべさいうひの
ことうとそ　おたくをかぶうふこへらくてきてうぐへやみぞつう
へくる　代表は　汲大どんかんどうちやめんの　ようこべ　泊まて
家内の大さうぞうしう　人目とうがひて　おさ　有る





さね。一寸八分のくろんぜもんをこうらに。いろ〳〵ふらんぜもんを縫ひ。のくらうんぜもん。大ど大ひのめうがをちらせのくふさうゆかさびまおのころのみそ上のかたのさうとぐろ〳〵毎上のがごのさうとぐろ〳〵毎上のがごのさうとぐろ〳〵毎上のがご






雙玉きこ人松葉
小三郎
日光のひとこと

えぐりてやうくとつゝおほぬぐりてまかり出まゐこゝにてあそべ〳〵
あさ日丸そのひとうちでうちあそびせ。あげやまだもむう〳〵
武士父のかんきをとるべのまをどり。もけざちやうとうう〳〵
うゝべうさをのかげでおのれもさぞよろこぶでござりませ
おちうぶあとをみてかやうくとちうさいをかう〳〵べ。かうたうち
作ちやもんへあんの肉と。ちんどんろそうちごんふけうぶのへ
おうさふよろことび。そのいろうをひろ
ところふおちあひ〳〵たり〳〵まれるをくせぞと。ようい
のうそぐそのところくうるようを出で。さてもかでうたかど出や
は波もりろともひとうかうさうちのをみむけやう。きてうが祢
ひこうらふうふがかうさうちのをみむけやう。きてうが祢
びきのうそやう。なもりろもろうまぜてりとおこうふきてうく
ちんど。こんありぐうやのてをのか。は波もりろともかうたうち

いぐさちせこうろんとをよろう。こゝふくらせ〳〵ふこうさざ〳〵。二まのみあ
のとうかうそくで。かんどうちやめんをけぐちのをうぐぞと。あげや
まにふおうふあうふもべ。をくのれなさけうがちぐ〳〵とおく〳〵うたた
波三ふとぐめうう。二まのみあのふこうさざ〳〵。今もまにがたかちむと。
今もまをくうう〳〵。大だんまへのこう。ふくふあうくかくこちら
をうう。かるとうくあさ尾大だんうかをうふてきこりがおうかが
りちうる一すハふのうそんぐうをうて。ふくふおうそれうやまふぐぞ
さうさうさうぐとがあのじやくちん。ふうくそうく紙ちうふのおあさ
尾がをのあもあぞうれうふりのおうんとは波ぐさうぐふ
おうさぐへ。おうふあうをぐうくうんぐうをいさ。それべをぐうく
ひをふくふうさうしが。うちうんぜをのかちうきふや。ちちまち
ゆものさうりうぐくあさ尾がおまへなりうう。こふお



浅尾が狂気観世音の
利益ありて本復の体

おさとやつてくるそのむこのありどころをたづねうけせよと。ふさうのむこもちをえやりしをうけ。なるかしやこともふびんとも。らうぜかくごぞえむさうせざご。ちづくやそうえをうる。武士おそるるのなさあのうとろくをぞうのふるまのかたぶろえておくゆ已○さてぶそその日とありくれば。おさ尾二条おん殊更きまも。波またとりこともおさけごちのちくして。やらいのうちふかまくみる。えとぐけの武士佐波手指矛。うるづらふ波九ろ。けさびもみおれせをうけて。やらいのうちふけんぶんをへめづしやどんを大どん。まことのなうへうへ鈴ちろ。ちうへをるらうさせ。ちくのがれぬとんおちうぐりまま。おんどやうふちやうぶせよ。これれおぞ長にとめがむをもおさへおるづく

いのとのおさろ。ちやのろろをあづけてちやうぶくへヤヤおざいさうおろやべうめ。るるおどうねうぶらみおちづろぞけ鈴ちろさるぶおくぐうおそべくこ。モウとのうへかやろ。うぶれざ。ちやるもさうねをろうもさけぐるめふかくうちぐぞ。ろうくさてうへこへのおこ。おくさもおそくこ。ころをもおくしん。人のなづめふさるもごう。ちろ。チョッパ父ましい。ろんどころなくりうちざへうざうろの女をぞおあおくろそれば。は波あさ尾をちりてつのふ鈴ちろとさうせ。かくぐとこ二人おちろをろ。さみこれのる日ぞや。狩んらのうろふ一時ふさんに。人ぐろくちろのろんざうのをさんをぜんおくおろたう。おく。おさろうるかま


大磯
曲輪の
後ろ
空地か
敵討
の体






純子
大尽實名
牛宍逢龍
左衛門武定が首級
幽魂佛果菩提の為
念佛百万遍修行を

富貴自在千秋萬歳樂圖



ほのぐゝやのりんきよ
常剛八こゝろのきこう
と祝ぶきこゝろ人長寿
のふこゝろふかやくを
たもちてこゝろ
ふこゝろをまるごゝろ
みくのこゝろ
吉日を
えゝゝゝ
ほゞ
きこゝろ
ゞ
こゝん
おのを
とゝり
ものこと
きよ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

秋萬歳樂圖



ほゞ
こゝろ
こゝろ
ふゝろ
ふゝ
ごてにくゝ
おゝんごゝろ
ごゝろま

國貞画

まごの
ちゝもせ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

○祝ひごまいはこゝろくかめのおりこゝろ
松屋松尾の神がこゝろよろこゝろ
仕系家ふりのざされ新玄二百
石のぬしとおり宝祝ひんめれこ
さこゝろこゝろ

○三こゝろふこゝろふかこゝろみのこゝろごゝろ
おこゝろび金二百あをおりて大のそ
一郭のこゝろこゝろさゝみ
かゞやけしのこゝろこゝろさゝみ

○二朱ぶん吉之人ハ武士ふこゝろこゝろ
とおりこゝろごもこゝろこゝろおりこゝろ
ふゝーゝろびおこゝろび金二百あま
申きこゝろおりなゞくあんこゝろの
身こゝろおりね

○あげやま屋の父叔父の御がかんきを
ちこゝろめんおりなふとこゝろんこゝろの
ふゝ十はよゝ之妻の旅代こゝろこゝろま
ふのこゝろこゝろかけこゝろおりこゝろんこゝろの
をものゞこゝろこゝろおくこゝろ人なゞこゝろ終こゝろの
こゝろがこゝろあんこゝろ人なれゞおゞのをこゝろふ
こゝろんこゝろとおふこゝろおりかくこゝろあくこゝろ人こゝろ
ちこゝろゞこゝろこゝろともおあくこゝろ
こゝろのこゝろこゝろこゝろともおあやまりこゝろんこゝろ

さるわざふは汝大どんとうりものうまれべあまつこのよむとも孫をやしそぶおよびて淡のまさごのよむともつきざと今紹英綾日ぐおまさう七珍万宝こぐぶ百さうをのの大福長者名代おやみ代おさぐれ石のの宝不とるまでいくく久ぐく家ぐささぐ〳〵苔清こけてひさうじ」のめでたきをいのを大八洲あき十方久長にたうが妻ぼ人の外ひとふむ女くのけだものもうくゆうれの仏あのうぐひあうざうへちうごろうまれあるめでたきうたいまで」かるめでたさうく〳〵うのれべうこそうへ人ぐくまで富貴ふこれふおやうて財宝宝ふ充満〳〵寿命長久家内安全ふ秋万歳万く歳納る家こそめでたけれ

昔唄花街始巻之下終

式亭三馬編

傚 中村一其 二朱判吉兵衛 直傳

細田文庫

右之頌句音節墨譜等不令加筆候
師若針芥子如棒同吾儕所好作者之
妄説繪師之虚誕雲顧君子認得吐喝
采了版元之来櫃幸甚

讀本新工夫直傳



式亭三馬戯作



正本所　江戸田所町　鶴屋金助版

教訓繪入　養育往来　全壹冊

幼童を誨育の種々古人の金言を廣く引むされバ世俗の書に
よく読ふも氏より生立といへどおよそ誨育よろしく拙育ゆへ
子も悪きと身となり亦そだてかたき悪人ともなるハ
すべて貧窮浮沈の咄ハなし貴人ともなり給ふ事ハ
一ぺんの世間児女の教訓一助ともなんぢさればこの書
かるべく求めたまふ人ハ有益大全元の善本なり

大坂書林　心斎橋通南久宝寺門前へ
秋田屋市兵衛板

○何うぞの本屋ハ此本ハ有ませんと云ハずに取次ぎ